九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

城内住宅誌その1総論と前史(戦中編)

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院

本田, 佳奈
九州大学

https://doi.org/10.15017/8682

出版情報：比較社会文化. 12, pp.111-148, 2006-03-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第十二巻（2006）一一一～一四八頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University, vol.12 (2006), pp.111~148

城内住宅誌　その1　総論と前史（戦中編）

服部英雄
本田佳奈

はじめに
第1部　町民館・座談会の記録
　資料1　『城内町二十年の動向』（城内自治会・城内土地対策委員会）
　資料2　城内住宅取扱方針
第2部　小林夫妻の戦争体験――記憶・記録
　その1　小林正夫氏・ネグロス島からの生還
　資料3　小林正夫氏・軍隊日記
　資料4　陸軍戦時名簿（小林正夫氏兵役履歴）
　資料5　長男の戦死公報（毎日新聞西部本社版）
　その2　小林種子さんと福岡空襲
　資料6　小林種子さんの手記

はじめに

福岡天神から美術館経由で六本松に向かうバスが、平和台競技場前を過ぎると、右手に閑静な住宅街を見る。城内住宅と呼ばれている。終戦後、外地からの引揚者と、福岡市内での戦災被災者の救済を目的に、旧陸軍用地・練兵場跡の国有地に建てられた集団住宅地である。一〇年前までは密集家屋だったが、いまは芝生の植えられた空閑地も目立つ。この地域は都市計画法による舞鶴公園（都市公園・福岡市管理）、そして文化財保護法による国指定史跡・福岡城跡に指定されている。公園化・史跡整備のため、住宅移転と緑地化が図られており、平成一七年現在で、すでに一八〇軒の内、半数に当たる九〇軒が移転完了した。移転先はバラバラだが、集団で福浜地域を選んだ人もいるという。移転は居住者の同意を得て行われる。移転を望まない家族も多数だから、今後とも一挙に移転が進むことはないだろうが、毎年少しずつ家は減るばかりで、新規に住宅が建設されることはない。「戦後」とともにあって、いつの日にか、「戦後」とともに消えていく運命の町なのであろう。

戦争はすべての国民に大きな被害を与えた。とりわけてこの町に住み始めた人たちは、何もかも戦争でなくした人たちばかりだった。戦後の歴史そのものを引きずってきた町である。この町で聞き取り調査を行い、そこでの生活と歴史を記録に残したい。この町の記憶を残すことは、戦争の記録にもなろう。

今回は『城内住宅誌』の1として、最初の2月の集まりでお聞きした町内の歴史の概要を座談会記録で紹介し、つぎに小林正夫・種子御夫妻からお聞きしたお話のうち、戦争体験の部分を紹介する。小林正夫さんはフィリピン・ネグロス島からの帰還兵である。今回従軍時の日記（手帳）や貴重な写真の閲覧を許された。種子夫人は福岡空襲で被災し、乳飲み子を抱いて避難をした。お二人の回想・記録から新婚家庭で幸福そのものだった一般市民が、戦争によって生死の境をさまようことになる過程や心情がきわめて鮮明

に伝わってくる。市民にとっての戦争の実態を克明に語り伝えうる貴重な記録と考える。したがって城内住宅自体の生活記録は次回に回し、今回は「その1（総論・前史、戦中編）」とした。

なお聞き取りには服部研究室のメンバーが参加したが、とりまとめは座談会については服部と本田が、小林正夫氏からの聞き取り・記録の整理は服部が、種子夫人からの聞き取りは本田が担当した。

また座談会には資料1として『城内町二十年の動向』（城内自治会・城内土地対策委員会）を、資料2として福岡市財務部局が作成したと推定される「城内住宅の取り扱い方針」を添付した。小林夫妻のお話には資料3として正夫氏の軍隊手帳（日記）、資料4として兵役履歴（陸軍省作成）、資料6として種子夫人の手記を添付した。3、4は個人の私的な記録であり、公開になじまないものかもしれないが、戦争を考える上で不可欠の資料であると判断した。また2005年9月11日毎日新聞に掲載された県内出征者遺族によるネグロス島戦死者に関する投書記事も資料5として添付した。

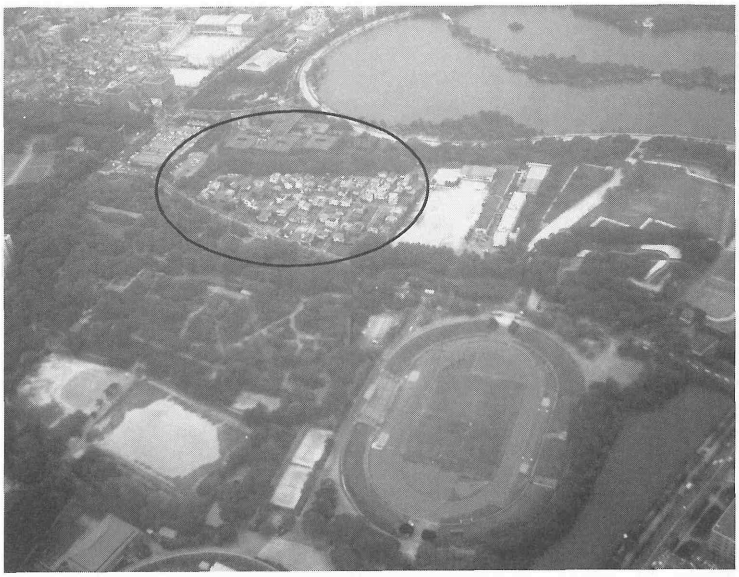

写真1　空から見た城内住宅（撮影　服部）

第1部　町民館・座談会の記録

第1回聞き取り調査（平成17年2月19日・城内町民館）

参加者…峰崎嘉洋（町内会長）・吉田重信（町内総務）・坂井明夫（最古老、薬剤師…発言は少ない）・小林正夫（復員・写真屋さん、少年期・簀子小）・松田・中尾（少年期・東京にいた）の各氏。

九大…服部英雄・貴田潔・西江幸子・本田佳奈

1　練兵場から住宅へ

昭和20年8月の敗戦まで城内練兵場であった。平和台競技場の位置には24連隊の兵舎があったが、みな焼けていた。

昭和21年住宅営団が戦災者および海外引揚者のため住宅を建設した。最も多かったときで200世帯、今の世帯主は多く2世である。

入居に際し、抽選はなく、書類審査だけであった。政府発行の戦災被災証明、復員証明があればよかった。被災も復員も両方とも同じ証明書であったらしい。

21年5月から入り始めた。5月に入った人は岩崎さんら。「市内で住めるよ」ということで、多くは8月ごろに入居した。はじめの頃はどこでも好きなところに入れた。「8月でもまだ建っとっちょったらしい。」まだ南の方はあいていて、建設中だった。

住宅営団は進駐軍の命令で昭和21年に解散。家はすでに建ててあった。借地・借家料を払ったが、特別の入居料はなく、無償で入れた。土台も何もない、柱の根を焼いて打ち込んだ掘っ立て柱の家。むろん電気もガスもない。今その当時の家は残っていない。全部建て直した。いくぶんおもかげを残しているのは城内町民館横の家ぐらい。

初代入居者以外に継承入居者もいる。留守番に入ってそのまま権利を買った（継承した）人もいる。昭和20年代であったが、昭和30年頃に新たに入った人もいる。

2　入居した頃

（吉田さん）家賃は30円。そのころ米は戦後で一升10円ぐらい。

――米3升ぐらいの家賃ですね。

ですね。賃貸だった。建物を払い下げたときに、24年か25年くらいに3000から4000円。うわもの（建物）だけ払い下げ。土地は国有地のまま。ようは権利ですね。

みんな30坪くらいしかない。最低25坪とか。50坪で2軒。入れるだけ入れてしまえて。最低限の生活ができるところからスタート。だいたい普通は二軒長屋で建った訳ですもんね。どんどん、人間がわんさかわんさか、引揚者やら何やら来るけん、しまいには四軒長屋もあった。隅の方は四軒長屋。まだ狭い。一軒18坪くらいしかない。そぎゃんところ、重なりおうて。ベニヤで背中合わせ。お話声なんか、しょんしょん聞こえる。

ここは水はけが悪い。山の水が大濠へ抜ける道（排水路）がない。1メートル掘れば水がでる。便所は穴掘って横にセメンをちょっと張るだけ。雨降ったら、長靴はいて入りな。ぶかぶか浮いてはね返るから尻をもち上げる。そんな風だった。

昭和48年、市会議員に申し込み、下水道を敷設して、やっと改善された。

3　家族との再会

復員兵はなかなか帰ってこない。夫婦がバラバラでも申し込みはできた。奥さんだけが先に入って、ご主人の帰りを待っている人もいた。

（小林さん）私の兄はシナ事変で戦死。コウシュウ湾上陸で、戦死。わたしも二回とられた。大東亜戦争の前にベトナム進駐、戦争になってビルマに上陸。四年兵役で満期になった。戻ったが一年半でまたすぐ応召。長男は生まれたばかり。今度はフィリピンで、飛行隊勤務だった。敗戦後も帰れない。昭和二二年までフィリピンに抑留された。引き揚げ船で名古屋に上陸。やっと家族に帰国の電報を打った。復員兵は優先だったから蒸気機関車の列車には乗れたけど、椅子席の上に立って、つかまってるような状態で、10何時間もかかった。帰ってきたら、焼け跡ばかり、家も何もない。川端の家の焼け跡に立って、呆然。

そのとき家内は乳飲み子を連れて城内住宅に入っていたけど、わたしはまだそのことは知らなかった。

焼け跡に残っとった人が一人だけおって、一軒だけバラックがあった。（電報宛先の）家がないから電報屋がしょうことなく（しかたなく）そのバラックの家に配達したらしい。たまたまその人は、この人なら城内町にいるって、知っていて連絡してくれたんですなぁ。うちんとは帰ってくるとは知っとったけど、家もないからどうやったらあえるか、わからず心配していた。

こちらも途方に暮れた。電車も何もない。店屋町（呉服町南）の一角だけは焼けなかった。そこにうちのおじさんがおった。あがりこんで、話とった。あんたとこは丸焼けよ、とか。おじさんは城内住宅のことは知らず、家族の消息がわからない。どうしようかって。そうしたらそこに聞きよった妻がかけつけてきた。親戚だから見当つけてきたんでしょう。あわてて来た。お父さんが帰ってきたって。偶然だったけど、居所がわかって、そうして城内町に入ったわけです。

――5年ぶり、涙の再会でしたね。

連絡してくれたその人とは今でもおつきあいしております。その人がいなければ、宙ぶらりんになっとったかもしれん。

4　練兵場は官庁と学校・住宅に

（松田さん）（城内には）財務局と国税局があった。昭和34年ごろには博多駅のほうに移った（総合庁舎）。学校は博多工業高校（福岡市立、昭和23年地図には「第二工業」とある）があって、焼けた材木で生徒が建てた。今は油山に移っている（その跡に舞鶴中）。福大の前身もあった。いまの芍薬園（お鷹屋敷）が本館。なんとか外語専門学校かなんか、いいよった（＊昭和23年地図に「外専」）。七隈移転後、しばらく夜間大学（サテライト校舎）で使った。今の公園になっとるところには川島女学校。洋裁学校があった。いまは今宿の方にいって舞鶴高校かな。みんな畳に座って、平机の低いとで縫い物しよった。お城のあと（南の丸）には西日本短大。それはいま洲崎にいっとる。

「城内はけっこう学園都市だったんだ」

「ああ。ほんとうやなあ」

（小林さん）（陸軍）衛戍病院はそのまま国立病院になって、あとで学校跡地に移った。わたし（小林）の長男は衛戍病院で産まれとる。

5　払い下げ運動

（松田さん）土地の方の払い下げ問題もあった。簀子のほうの土地（国有地）を200円だったから、こっちは300円で、ということだった。坪300円で買おう（払い下げてもらおう）って、値段のことを交渉してるときに、即、市のほうが飛んできて「公園緑地帯の枠にはまっとるけん、売買することならん」て。営団と交渉しているときに市の方が待ったをかけた。簀子の方は売買が成立した。こっち（城内団地）側は財務局と交渉して。（国・財務局は売るつもりだったろうけれど）市の方は建設省に交渉しかけてきて、ここは公園予定地、緑地帯ということで（払い下げは）止まった。建設省の役人が見に来るというから、みんなでお迎えに飛行場に行ったけど、入れ違いで建設省がさきに車で来た。城の上にあがって、ここのトタン屋根の住宅を見て「なんだ、これは。（みすぼらしいから）早くのけた方がいいな」って。終戦直後は掘っ立て小屋ですもんなあ。それでアミかけちゃったわけです。あとでグリーン構想（大濠・舞鶴両公園を一体の公園として連続する案）ができた。

ここは国有地だったでしょ。アメちゃんが払い下げれって。マッカーサー指令が出たわけですよ。それで払い下げるから、住宅営団が市にこうてくれ、ていうて。そしたら三好市長がなあ、いやぁ、あげなボロいとこはいらん、ていうて。で、しょんなしに、引き上げ者・戦災者がいっちょん銭持たんとに、家の分（地上の家屋）だけ3000円から4000円で、みんな月賦で買うた。（底地については）財務局と土地の賃貸契約を結んだ。

6　回想

194世帯あった。昭和46年頃。

一番多かったのは朝鮮総督府に勤めていた人たち。それから満鉄。外地での公務員が多かった。

（松田さん）（城内住宅とは別に）いまの美術館の駐車場とあやめ池は公務員宿舎だった。財務局もいたし、九大の先生もいたし。便所の水洗化もこと一緒にした。自治会にもはいっとった。常会やら一緒。そやけん子供が60人おった。みんな若い人ばっかりがどんどん転勤してくるけん。そのころは２００なんぼ。１９０何軒あったころは昭和46年。」

（峰崎さん）となりの舞鶴中学のグランドを借りて城内町だけで運動会をやったっていうのは……

「そんなの、しょっちゅう、毎年よ。昭和30年のあとさき。」

「昭和20年ごろから家がぽつぽつ建ち始めて、10年後くらいが一番にぎやかで団結してた。子供も城内町は多かった。70人ぐらいいたもんな。」

（中尾さん）少年野球チームを二つ作ったなあ。

（松田さん）ソフトボールでは二回優勝しました。

（峰崎さん）赤坂校区で町内ごとにですね。ソフトボールチームを作るんですよ。で、城内は子供が多すぎてですね、予選をしたっていう。平和台まで、福岡市大会まで、出てですな。教育委員会から表彰。

「子供たち泣きよったもん。」

（松田さん）ここ（公民館）にもずらーっと額がかかってあったけど、もう捨ててしまいよった。

団結していた。みんなおんなじレベル。引き揚げやらなんやらで、なんもない。全財産なくしたものばかり。運動会でも自治会でも同じ気持ちでできた。金持ちなんかいないから。

「でもむこさんがとうとう兵隊から帰ってこなかった人もいた。」

「おくさんがずーっと靴磨きをしてた人もいた。そんな人が二人か三人。」

盆踊り、おまつりの金魚すくいやらね、子どもがいっぱいおったから、その頃は。町の真ん中で岩崎さんのあたりやらに幕を張って映画。公民館の建物の中の三角になっているところの棒、あれは祭りのために太鼓を作って、吊しておくためだったんですよ。倉庫に入れておくと湿気るといって。（それを倉庫へ）入れこんでねぇ、カビをこさえてバサバサに乾いてしまった。破れてしもうてねぇ。太鼓は最近まで公民館にあったけど、しまい込んで気がついたらパサパサ、直すのに一四、五万かかる。もう使わんからって、数年前に廃棄処分にした。太鼓は高いですよ、買ったとき、あの頃でも三〇万ぐらいはした。千代町の太鼓店に買いにいって。公務員宿舎も含めて二〇〇数件あった頃はほんとうににぎやかなもんだったですよ。太鼓でも（打ち手が多すぎて）なかなかもって応援されんぐらい。

7　お城の時代、練兵場時代のなごり・聞き伝え

（松田さん）もともと黒田藩時代に赤土で埋め立てをしている。基礎工事のとき、大きな石、丸い石があって、刀が出てきたこともある。土手ば掘ったら素ぼりの下水路が出てきたことがある。下田さんが自治会長のころ。たぶん身分のある武士がいたっちゃなかろうか、って市の教育委員会の話になった。

（小林さん）24連隊、ドンタクの日は連隊の中に入れる。市の話じゃ殿様の時代から入れた。酒保（しゅほ）があって、酒やお菓子、買って食べられる。外堀にそって兵舎があった。城内練兵場と城外練兵場があった。

ここは城内練兵場。護国神社、大濠高校は城外練兵場のなか。六本松（大濠高校南側）は大たい馬屋だった。軒下がこれくらい下の方（低く）にあって、軒が50センチぐらいしか空いていない。あそこはそのまま国有地が払い下げられて、引揚者がはいってきた。小屋はそのままで。そこに入って馬小屋で生活していた。いまはみんな建て変わっております。

（中尾さん）戦前から護国神社はあった。県営でね。小学校時分、昭和10年ぐらいにできた。昔じぶんが（親戚を訪ねて）東京からきたときは土手のほうからずうっと入って神社に行きよった。靖国神社のまね。鳥居なんかは昔からそのまま。昭和10年頃、紀元２６００年。提灯行列を東京・靖国神社でしたけど、こちらにもあった。シンガポール上陸とかあればすーぐ、提灯行列にひっぱりだされよった。仏印の、今のベトナムやらなんやらに上陸したって聞いたら、旗振ってちょうちん行列。戦争中は、負けても勝ったっていってな。ＮＨＫのそばの住宅地が、城外練兵場。ＮＨＫのへんに戦後住宅があったとは知らんけど。

赤坂小は軍隊の馬小屋。

（松田さん）ボウジョの前に池（いまの橋が架けられた池、あやめ池）がある。24連隊の守衛の小屋があった。若い女性が殺されて幽霊が出る話をちらっと聞いたことがある。恋人が守衛に立っていると思って、彼女が会いにいったらその夜は違う人が守衛に立っていた。「来るな、来るな！」というのにヘラヘラ笑うて近づいてきたけん、ボンって撃たれた。という、戦争中の話。

（小林さん）わたしは簀子小学校の出身。黒田別邸の所にいた。練兵場付近が遊び場

だった。（兵営には入れないが、練兵場には入れた）。大濠の土手にムクノキがたくさんある。その先は見渡す限りのホリ。いわゆる大濠。こどものときムクの実をとった。それがおやつ。水の上に実がなって、いい実があるもんだから登って取りに行って、ホリのなかに落ちよったですよ。レンコンばかり。アップアップ、深かった。子どもだったから。

――よく助かりましたね。

先が広い。どこまであるかわからんぐらいに広い。向こうも家も何もなかったから。そのあたり、埋め立てられて、いま簡易保険になっている。大濠の埋め立ての頃、まだ建物が建たんころ、ブワンブワン、ブアンブアンしておもしろいから、遊びよったです。ぬかるみみたいな。

いまの牡丹園は将校集会所だった。その前にも大きなムクノキがあって、兵隊さんから「おまえみたいな、あぶないぞ」って叱られよったですよ。

大濠公園は橋に昭和2年ってある。昭和6年に博覧会。「シナ」（中国）の西湖のまねをして作った。

大濠を埋めた。黒門川とつながっていた。潮の満ち干もあったでしょうね。だから魚がむかしはサヨリ、ボラ、ウナギ、フナもたくさんおった。フナは塩水と半分半分で生きていける。気象台のあたりから真水が出よった。

気象台から上池（あやめ池のことか）、湧き水があった。そこから赤坂門から天神まで、天神のＮＨＫ（旧地、今はＮＴＴ）までずうっとホリ、ＮＴＴのあの辺はホリの跡。わたしが小さいときやったから、何年かわからんけど、その頃までホリはあった。6歳ぐらいの時、半分埋まりかかっとった。魚もおってウナギが出てきた。天神の近くまでホリやったですね。西日本新聞、ムクノキがあった。それがむかしの堀端の木。土手が崩れんごと。大きな木で道路の上さ、かかっていた。みんながそこで涼みよった。（現在の大丸ビル）正面のグリーンベルトが大木の生まれ変わり。

8　福岡空襲

（中尾さん）わたしはいまの中学1年生の時、学徒動員で、機関車の石炭くべしてましたもんね。6月19日の空襲火事、ワンワン燃える。逃げると（人）で満員、博多駅の廻り、憲兵がいた。火事を見たらいかん、って。（戦争中は何でも）いっぱい隠しよったばい。しゃべったらいかん。

（小林さん）うちの家族はねぇ。川端、十五銀行の方へ逃げた。その下（地下）に逃げた。入りよったです。そこがいつも逃げたところ、指定の避難所。今の西日本銀行の下、博多座。でも虫の知らせ、あぶないからって、そこには逃げ込まなかった。入った人は、百何十人かが、蒸し焼きされとる。鉄の扉、電気が切れてあかんかった。

――燻製たい。

（小林さん）妻は那珂川の橋の下におった。ちいさか子供を負ぶって。対岸、どっとコッコクコッコク燃えるのが見える。上から焼夷弾がずーっと落ちてくる。中州の中華園とか、ブラジレイロ、ずーっと燃えるのが目の前で見えた。川が見えて繁華街が燃えた。うちあたりも全部燃えた。潮が満ちてきて下駄ば流された。

（中尾さん）中学4年の時やった。川端は人間のおらんっちゃ、焼けてしもうて。防空壕の焼けて、焼けた人間の後かたづけ。同級生もおった。服をかぶせて。

築港からずーっと何もない。中学校も焼けた。半焼けの香椎倉庫の品、同級生に持って行け、って。片倉ビルだけが焼け残った。呉服町の角、大丸のビル、壽（ことぶき）屋の向かい。

9　公園の造成・区画整理

（坂井さん）私は軍医学校から薬剤官。新宿の軍医学校は空襲で焼けて甲府に疎開、私は盛岡の野戦病院で薬剤少尉。軍隊からすぐ帰って、佐賀におった。城内へは先にいた人から買って入った。そのひとが大阪かどっかに転勤。

（松田さん）昭和24年に国体。道路を直したり、野球場がでけたり、陸上競技場がでけたりした。アメちゃんがブルドーザーでぜんぶ平らにして。めずらしくってみんな見に行きよったですもんね。（勤労奉仕の時はなかなか進まなかったのに）どんどんどんどん、あっというまに整地しようもん。

（中尾さん）して、泥のあがったとをわれわれが勤労奉仕。今の堀はだいぶ、狭（せば）なっとるですたい。

いま鴻臚館で、あれこれ掘りくり返しとるがな、昔にだいぶあった（のを捨ててしまっている）。平和台競技場の時、いろいろ出た。あげる泥の中に割れとる皿やら。いっぱい捨てている。土手の方に埋めた。泥を押し寄せている。勤労奉仕で我々が見とります。赤坂小にも埋（うめ）とる。

（松田さん）バス通りは昭和24年にできた。むかしは小さく細い道。

赤坂の道も山を切りひろげた。動物園から舞鶴城までずうっと半島のように山が来よった。あっこは、国体道路はこう、切り開いた道。そやけえ少（すこ）し、くだり坂になっとってでしょうが。柳原往還といった。今のケヤキ通り、赤坂3丁目。町名変更で赤坂二丁目になった。もとの町名が柳原町。お地蔵さんが山の上にあったけど、切ったから下ろした。峰花台（ほうかだい）（福岡藩の烽火台に由来する）に抜ける道もある。あそこの県営住宅は歩

くのもきついくらい、かなりの急傾斜で大分きつい道だった。道真が途中で寄った菅原神社は桜坂2丁目にある。

バス道路ができた頃から規制も始まった。

（峰崎さん）あるときから家を建て直すときに住宅公庫が融資して。道路から2メーターはセットバックせいとかね。敷地の間は最低1メートル開けなさいとか、ね。住宅らしい規制はそのころから入るようになりましたね。

（そのとき）土手をうっくずして巾50メートルもある道路を付けようとした。食堂から北、舞鶴中のネット際まで、道路にするから立ち退きということになった。あとは残っていいと。立ち退きを通告された。（史跡なのに）土手は崩す、ここはつぶすつもり、城内町も反対、ワンワンもめた。藤村さんたちと交渉にいった。

……

（松田さん）大濠公園と土手のところに道路を作るいうてね。50―30メートルの連絡道路線て、この冊子（後掲資料）にも書いてある。こっちは払い下げて、あっちは立ち退けって。〝キカン（結核）病院（国立病院）から西側について。すでに建設省から認可を得ていることが判明した〟って。

土手から、溝からこっちが〝市〟（の管理、舞鶴公園）じゃもん。溝から向こうが〝県〟（の管理、大濠公園）じゃ。道路は〝市〟のほうにつくった。ここの道路（バス道路）はだいたい潰すつもりじゃった（別の大きな規格の道路にするつもりだったらしい）。ばってん城内町も反対したしくさ、蹴ったしくさ

「岩崎さんのところから4、5軒から北側は立ち退きを通告された。」

「益田さんもですね」

「んで、ワンワンもめたっちゃん」

「それを立ち退いたら、また次も立ち退かなきゃならんって話になるだろう、ということで。で、もう、団結して蹴ったわけです。」

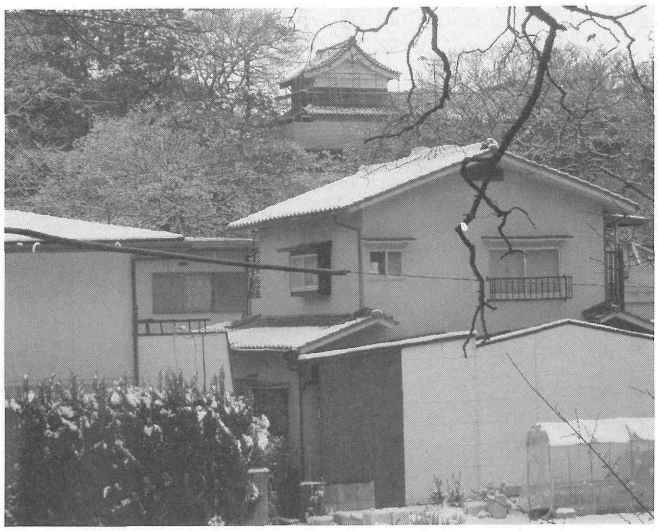

写真2　現在の城内住宅

「そやけん今大濠公園に抜けとる道は消防道路として小さく作った（道路の計画幅員を減少して、現在の大濠公園に抜ける道路にした）。それまでは土手は続いてて大濠へ抜けることはできなかった。」

「それじゃですね、松崎さんところが下水道がはいっとらんのは、立ち退きに反対したからですか？」

「いや、あそこは幅がせまいけん。2・5メートルは道路として認めん、て。」

「立ち退かんかったけん、仕返しに下水道いれよらんかったかな？って思って」

「市会議員さんやらとだいぶ交渉したけどね。市としては金出されんいうて。」

「立ち退き命令されたのは、いまでいう1組（いちくみ）ですね？」

「いや4組まで。お宅たちも全部な。」

「だから、今、食堂があるでしょうが（城内食堂のこと）。あれから上（北）は全部立ち退けって話だったらしい。」

資料1『城内町二十年の動向』（城内自治会・城内土地対策委員会）

一、城内町の発足と其性格

（一）当城内町住宅は昭和二十一年即ち終戦の翌年から、戦災者並びに外地引揚者のため、国の緊急施策として、旧軍用地であった現在の国有地に、半官半民的性格の住宅営団によって着工建設され、同年六月から入居して発足したものである。

（二）随って当城内町住宅は、県営もしくは市営の住宅と異なり、半ば国営的性格をもつものであって、市の企画する舞鶴公園予定地指定前から存在しているものである。

二、城内町発足後現在に至るまでの推移と土地獲得に関する行動の概況

（一）1　昭和二十三年七月住宅営団の解散に際し、同年八月二日、当町民は正規の手続きを経て家屋の有償払下付を受け、同時に家屋の登記を完了して、法的居住権並びに地上権を獲得している。引続き土地に関しては、大蔵省の出先機関である北九州財務局との間に正規の借地契約を結び、現国有地に対する借地権を獲得した。

2　一方財務局は、当町との借地契約締結前、本市に対して、当町地域を含む一帯の、国有地有償払下げを提案しているが、市は無償を条件としたため不成立に終っている。こうした経過を辿っているうちに、市は昭和二十三年十一月二十九日、当町民の法的居住権、並びに地上権或いは借地権を無視して何等考慮することなく、突如として建設省に対し、当町地域を含む一帯の国有地を舞鶴公園予定地として指定する旨の申請書を提出してその認可を得るに至つた。尚其後市は、平和台野球場並びに陸上競技場地域の無償払下げを財務局に要請しているけれども、これに対して財務局はあくまで

有償を主張したため不調に終っていることを附記しておく。

3　更に其後建設省は、舞鶴公園予定地内であるにも関わらず、現存の国家公務員住宅を建設したが、市はこれに対して何の異議も申立てていない。随って当町は同住宅居住者の要望もあり、市の承認を得てこれを城内町に編入した。

4　一方当町は、その居住地の払下げを速やかに実現するため、三好福岡市長時代、関係官庁の認可を得て、法人住宅組合を組織し、土地払下げ運動を行ってきた。然しながら其後に於ける状勢の変化に伴ない、当組合を発展的に解散。続いてこれにかわる土地払下げ促進期成会をつくり、更に三転して現在は、地上権所有者約二〇〇世帯一〇〇〇名全員の委任を得た土地対策委員会並びに、これが母体である町自治会によって、土地払下げ運動及び公園予定地域よりの除外運動を行っている。

（二）1　さて当町が前記の通り借地契約を締結したのち間もなく財務局から、当該借地を払下げるとの通告を受けたので、直ちに払下げの方法或いは条件、払下げ価格等に関して再三交渉を重ねた。因みに右払下げの通告は、国有地を払下げる場合、現在居住者に対して優先権を与えるとの大蔵省示令に基づいてなされたものであって、現在もこれは変更されていない。随って財務局は最近この点を質した際にも、当町地域が公園予定地帯から除外されさえすれば直ちに払下げると明言している。

2　一方市は、当町が前記のように払下げ交渉を行っている際、公園予定地内にある当町地域の払下げは見合せてほしいと財務局に申入れた。随って財務局としても、その権限を異にする大蔵建設両省の立場を考慮して払下げ実施を保留したため、この交渉が頓挫を来たすに至ったのである。

3　越えて昭和三十四年九月三日には、当町と同じ公園予定地内にある財務局、国税局、市立博多工業高校（現在の舞鶴中学）及び基幹病院の用地一帯を公園予定地域から除外している。更に近くは高等裁判所の用地もこれを除外し、又最近には須崎浜市有地（公園計画地）内の県文化会館敷地も除外されていることは明白な事実であって、遺憾ながら官尊民卑の措置と言わざるを得ない。殊に博多工高校舎建設の際の如き、その用地面積が足らぬからと言って当町北部の居住者の立退きを要求する等、町民の居住権、地上権、借地権を無視した事実もあって、現舞鶴中学校長までが、当町北部の土地に関し元来あれは当校の敷地であると当局並びに前任者から申し送られているので左様承知していると言う始末である。

（三）1　当町は、前記のような事態発生後も引き続き財務局に対して土地払下げの交渉を重ねて来たが、前述のような牆壁に妨げられて進まぬばかりか、市と財務局とは互いにその責任を転嫁する始末。殊に当時の建設局長の如きは、当町民全部を無条件にて立退かせると暴言をはく有様であった。ことこゝに至っては接渉の目標さえつかみ難くなるので、当時の衆議院議員簡牛先生の御助力をあおいだ結果、再びこの交渉が軌道に乗るようになったのである。

2　この事あって以来当町は、運動の重点を、土地払下げの実現を阻んでいる公園予定地帯よりの除外に置き、或いは市議会議員を通じ、或いは衆参両院議員の協力を得て市との接渉を続けてきたが、市側はスタートに於いて、当町民の地上権、居住権、借地権を考慮することなく公園予定地とした、取扱い上或いは事前の調査手続き上のミスを認めかながらも言を左右にしてその確答を避けてきたのである。

3　こゝに至って当町は、昭和三十七年十月十日、中井議員を紹介議員として市議会議長宛正式に請願書を提出し、又翌昭和三十八年二月七日には、再び市長並びに市議会議長宛歎願書を提出した。

4　しかるに昭和三十七年提出の請願書に対しては、当時高等裁判所敷地問題が紛糾中であったため、建設委員会に於いて何等審議することなくこれを不採択とし、又三十八年提出の歎願書に対してはこれまた何等の回答もなきまゝ有耶無耶に葬むられている。

5　尚昭和三十八年二月二十四日には、私立大濠高校に於いて市長と会見、口頭を以って縷々麗々陳情し、翌三十九年六月当町で市長と会見した際にも、公園予定地よりの除外方を重ねて陳情した。其際非公式ではあったが市長も当町地域を公園予定地に指定するにあたって、事前の調査手続き上ミスがあったことを認め、更に当町民の強制立退きを命ずる権利は勿論市にないし、といって市の財政上多額の経費を出して立退いていただくわけにも行かぬので、早急にとは言えぬが、時期を見て公園予定地から除外せねばと考えられる。但し条件として、現状のまゝの家屋では困るので、両公園の風致とマッチした住宅街としてほしいとの意見を伺がった。そこで当町の見解として、市長の御意見は、家屋の老朽、家族数の増加等からみて我々の切実に望むところである。然しながら県市はいまだに建築の許可さえ与えぬではないか。随ってこれ等の問題解決のためにも早急に当町地域を公園予定地帯から除外し、土地払下げを少しでも早く可能ならしめることが絶対的先決の条件である旨を説明した、尚、右市長と同一の意見は、前建設局長並びに次長等からも出ていたことを念のため附記しておく。

6　一方こうした接渉の過程にある際、当町の一、二、三、四組七十余世帯を立退いてもらい、舞鶴大濠西公園を結ぶグリンベルトを含めて50m乃至30m幅員の連絡道路設営計画が進められ、又他方、基幹病院の西側から文化財である堤防を経て、当町南部二十世帯余の敷地にかゝる道路計画もあるとの情報を得たので、早速市道路課にその実否を質したところ、これはあくまで試案であって、何等決定的のものではないと回答した。にも関らず前者の連絡道路計画に就いては、既に建設省の認可を得ている事実が判明したので、昭和三十八年十二月十日、当時の建設局長、同次長並びに公園課長を当町に招き、中井市議立合のもとに懇談会を開催した。しかるに同席上に於いて次長は、前記連絡道路の実現をあくまで強硬に主張し、もしこの提案を当町が認めるならば交換条件として残余の地域を公園予定地帯から除外してよいとさえ言った。依って当町は、大濠公園に抜けるあの道路が当町の災害防止を目的として、県との八回にわたる交渉の結果その承認を得て、当町が設けたものであり、もし連絡関係の道路を現幅員のまゝ使用するというのであれば譲歩の用意があることを説明したが、次長はあくまで自己の主張をまげないため、当町としても、立退き問題といゝ、町私設の道路の無断使用問題といゝ、余りにも非人道的且つ不法のやり方として断乎これを拒否したので、話し合いは遂に物別れとなっている。

7　こうして最近まで当町は、大憲塾問題、高裁問題、県庁舎移転問題、合同庁舎問題等々の発生によって市のおかれている立場を十分に考慮し、その言うままゝにあくまで紳士的態度を以って隠忍自重してきたが、いぜんとして公園予定地除外問題が解決しないので、去る四十年十一月八日、先の市機構改革により新たに椅子に就かれた建設計画局長・同次長並びに留任の公園課長を当町に招き、町の事情具陳と併せて当局の意考打診のため懇談会を開催した。其結果を要約するならば、先づ局長談として、従来市は建設省に対して再々都市計画変更の申請をしているし、当町の問題は自分としても着任早々のことだし、甚だ困難な問題と考える。随って現在確とした何の対策も持っていない

が、もし建設省が最初の計画通り実行せよといっても、自分としてそのまゝ引受けてくる考えは持っていない。又建築不許可によって生ずる町民の損害に対して市はその責任を負うかとの質問に対して、次長は、当町管理者が責任を負うべきであって、市が責任を負う性質のものでないと言う納得ゆかぬ答弁との二項となる。尚以上に関して詰問すべき問題も多々あったが、この会合の趣旨上他日にゆずることゝして散会した。

三、以上の経過と事実に対する当町の見解と決意

以上の経過と事実から推断するに、市当局が従来から今日に至るまでとってきた態度と措置に就いては、当町民として甚だ理解に苦しむものがある。先ずその一つとして、当町民の所有する家屋の所有権並びに地上権は、民法に於ける物件の種類（物権法定主義）に関する条項一七五条によって、法的に認められたものであり、民法上の解釈として、物権は排他性を有するものとなっている。即ち（一）既存の物権は後発の物権を排斥し得る地位をもつと共に（二）支配が侵害された場合には、その侵害者に対して侵害の除去を請求し得る権利を発生せしめるし、物権の本質に基づいて優先的効力と物権的請求権とが認められるとなっているが、市はこれに対して如何に解釈しているのであろうか、甚だ不可解である。勿論民法上に於いて、公的物権が私的物権に優先することは百も承知であるが、それだからといって公的物権の本質或いは性格上の諸点を全然考慮しないで、唯法文一点張りに処置すべきものであろうか。もしその公的物権が市民の生命財産や生活上絶対に欠くべからざるものであるとか、或は市の産業発展上もしくは交通上極めて重要性のあるものであるとか言うのであれば我々もまた納得出来るけれども、一方市の公園予定地であった所に学校あり病院あり裁判所あり官庁あり等々、何等公園と関係もなく必要性もないものが認められて現存している実情から考えて、甚だしく疑念をもつものである。

次に、現在も引き続き行っている当町地域の公園予定地帯除外運動に対して、市は大憲塾問題や高裁問題或いは県庁舎移転問題、又近くは合同庁舎問題等を取り上げ、かゝる問題の発生中に当町の問題を持ち出すことは、時期的に見て当町にとり不利と考えるから暫く待てと言うように、一面当町に好意的とも解せられる表現をもってその都度当町の運動にストップをかけて来た。尚そればかりでなく、大憲塾問題に関しては財務国税両局あとに移転させるからと言い、又県庁舎移転問題に関しては、地元として大濠移転反対の署名運動を起してもらい度いとも言って来たのである。こうした経過を迫るうちに、大憲塾問題を除いて他の問題が解決又は殆んど解決されたにも関らず、今日に至るまで当町の問題に関して何等意思表示さえしないのは何故であろうか、甚だ遺憾ながら市当局の誠意を疑わざるを得ないのである。

更に一方我々が市当局と接渉する度毎に聞かされることは、再々にわたる本市都市計画の変更と対建設省関係の問題であるが、事実上本市は建設省に対して度々計画変更の申請を行っているし、建設省としてもその都度本市に対して苦言を呈しているであろうことは十分察知出来ると共に本市がその対策に苦慮していることもまた十分に察することが出来る。然しながらそれ等の問題は、市の都市計画面に何等かの不備欠陥があったか、或いは事後発生した情況の変化によって変更のやむなきに至ったかの何れかではないかと考えられるが、いずれにせよこれは市当局の責任に関する問題であって、当町の何等関知せぬところ。随ってその責めを当町に皺寄せするが如きは、全くもってお門違いの話しであり、甚だ心外に堪えぬところである。

とはいえ、今仮りに市当局の立場になって考えてみても、都市計画と言わず他の計画と言わず、従来再三変更されている事実は、独り本市だけでなく、他市町村都道府県をはじめ、国でさえもやっていることであって、国際情勢、国内情勢、地方情勢等が日に月に変化しつゝある今日の状態からするならば、むしろ変更される事の方が妥当と言うべきではなかろうか。随ってこうした見地に立ち、信念をもってやるならば建設省と言わず如何なる上司官庁に対しても何等遅疑逡巡する必要はないと信ずるのである。

以上の如き観点から今当町が市当局に対して切に要望したいことは、一体当町地域を公園予定地帯から除外するのか、或いは如何なる犠牲を払っても当町民を立退かせると言うのか、その何れかの態度を速やかに明示してもらいたいと言うことである。勿論前者の場合に於いては、土地の払下げをまって舞鶴大濠両西公園の風致にマッチする家屋の建築と町造りをする確信をもっているし、又後者の場合、あらゆる点について我等町民が十分納得出来る条件が提示され実施されるならば、あえて前者にこだわることなくこれを了承するに吝さかではない。然しながら今迄のように、何等態度の決定もせず意志表示もせぬまゝ、あたかも当町民を蛇の生殺し的境地におくような態度を継続するならば、まさに主権在民下の市政として又市民の生活安定のための市政としてあるべからざるものと推断し、断乎これを排除するものである。

依ってこゝに当町としては、今後徒づらに当問題の解決を遅延される事態を考慮し、既に諒解を得ている衆参両院議員其他の協力を得て、直接建接省に当町の性格、事情或いは今日までの経過を具陳し、その裁断を仰ぐ準備を完了すると共に、最悪の場合、法廷に於いて闘争する決意をも固めているのである。

希くは当町が右の如き措置に出るまでもなく、市当局としても誠意と良識をもって速やかに当町問題の解決を図られるよう切望してやまぬ次第である。

以上

資料2　城内住宅の移転について

（表題メモに「土地関係　財務局の話」とある）

城内住宅の移転にかかる、当面の移転事業の実施方法及び城内居住者等に対する取扱い方針

城内住宅は中期（20年前後）移転施設ととらえ、事業にあたっては住民の意向を十分尊重し、柔軟に対応していく必要がある。このため当面賃借権を第三者に譲渡し区域外に転出しようとするものを中心に、次のような方法で移転事業に着手する。

1　賃借権については第三者への譲渡をせず、福岡市が代わって取得（賃借権抹消）について、財務当局とも連携を図りながら、地元、借地権者との折衝を行う。

2　賃借権の抹消、建物の移転その他に要する費用は、市が負担するものとし、同時に移転対象となる区画の土地（底地）区画を、更地価格から借地権相当価格を差し引いた価格で、財務支局から所

得するものとする。

3　移転については、集団移転や強制的な立退きを図るものではないが、移転希望者には代替地や代替住宅の斡旋を行う。

4　建物の建替、増改築については、建築許可申請時に移転を要請することとするが、同意の得られないものについては許可することとする。

5　取得した土地については、市で芝張り等の暫定整備をし、将来の公園用地として管理する。

参考　城内住宅概要

（1）　城内住宅の経緯

昭和21年6月　住宅営団が城内に住宅を建設
昭和23年7月　住宅営団が解散
昭和23年8月　住宅を入居者に有償払い下げ、土地は入居者と国が賃貸契約を締結
昭和38年2月　土地の地元払下げ交渉の一環として城内住宅地区を都市計画公園区域から除外する嘆願書を市に提出（大濠高校で市長と会見）
昭和41年12月　福岡市議会建設委員会で城内住宅地区を都市計画区域から除外する請願採択（ただし市としては城内住宅除外は問題が多く、長期的に公園化を図る方針として除外していない。）
昭和43年1月　契約更新
昭和43年6月　城内住宅の移転について地元代表、市議会議員、及び市で交渉
昭和45年3月　移転候補地として西公園下埋立地等を地元に提示
昭和49年7月　三役会議（移転候補地として地行埋立地を検討）
昭和58年4月　三役会議（移転候補地として西部地区埋立地を検討）
昭和63年1月　賃貸契約更新（昭和63年1月～平成19年12月31日）
平成3年5月3日　「舞鶴城址将来構想」答申
平成4年1月　城内住宅の移転について　調整会議
平成4年3月　城内住宅の移転方法について　財務支局長宛協議文書提出
平成4年12月　財務支局から口頭により回答
平成5年1月　政策会議により当面の移転方法を決定
（以上はタイプ書き、以下の一行は手書き）
平成6年6月　5区画について各賃借権者と賃借権抹消、物件移転補償契約を締結すると同時に、財務支局と土地（底地）の売買契約を締結する。

（2）　城内住宅の現況

ア　敷地　大蔵省用地
イ　面積　26、434平米　住宅等用地19、424平米　道路部分等　7、010平米
ウ　住宅等戸数　196戸（平均敷地面積99、1平米）
エ　賃貸契約件数　184名のうち一括契約の他、3件

（3）　法規制

ア　昭和10年2月10日　風致地区（都市計画法）
イ　昭和23年11月29日　都市計画公園（〃）
ウ　昭和32年8月29日　国史跡（文化財保護法）

第2部　小林夫妻の戦争体験――記憶・記録

その1　小林正夫氏・ネグロス島からの生還

＊聞き取り調査は05年7月16日、以後7月27日、9月10日、9月19日に追加・補訂　聞き手は服部

黒田邸と練兵場　簀子小の出身。子供の時に黒田邸にいったことがある。長い廊下を伝って行った。畳敷、海の方にいったのを覚えております。廊下の先が檜みたいだった。潮見櫓があった。かすかにおぼえとります。

舞鶴中学の裏、いまの大濠公園の入口には招魂社があった。ドンタクの本家本元、詣った。連隊にはずーっと塀、歩哨が立っていた。いまのバス通りの真ん中（道路のセンター）ぐらいの位置。国立病院のあったところは騎兵の練習場、横が偕行社。城外練兵場は塹壕が掘ってあった。上池（かみいけ）の、こっちからみて左（東側）が実弾射撃場、右（西側）が狭窄（きょうさく）射撃場。小さい弾。孫を連れて行った。いまでも弾が出る。昭和二年頃、大濠で博覧会。

満州へ　二度、応召した。最初は二十歳。昭和十四年で独身だった。それまで西日本新聞で写真部記者だった。

そして満州、ノモンハンにいった。航空通信兵だった。チチハルというのはモンゴルの方。カンジル廟もあった。極彩色で地獄極楽が描いてある。零下40度の興安嶺、オオカミの声が聞こえる。軍用車の移動といっても貨車の中。トイレはない。小便をすると霧になって、自分がするときも小便だらけになる。

ハルピンはまつげがピタピタ付く。風呂にはいるとき、初年兵、脱いで入って、入浴も五分ですます。二年兵はゆっくり。風呂から兵舎まで、十五歩。手ぬぐいがカチンカチンになっている。

わたしは新聞社で写真班にいたから、師団司令部の写真班がカメラを持たしてくれた。ハルピン駅頭とかの写真、兵隊の集合写真なんかはそのときのもの。

南方に移動、私物は置いたまま。それを国から実家、生まれた家、土手の町、因幡町・長田（小林さんは小林家に養子に入っており、実家。旧姓）の家の方へ送ってくれた。ここは焼けなかったから、それでいま満州の写真が残っている。私ら関東軍が国境から

入れ替わって仏領インドシナへ。内地からの予備兵と入れ替わった。

仏領インドシナ　つぎの戦地が仏領インドシナだった。台湾・高雄の横にヘイト（屏東）という飛行場があった。そこに一ヶ月ぐらいいた。

シンガポールから船でビルマ（いまのミャンマー）、首都ラングーン（いまのヤンゴン）。イラワジ川の畔、夜着いて宿営、イギリス人の民家に入った。そのころ日本は勝っとる頃。陥落してすぐ、まだパンパンいってるぐらいの時。その音は銃声というよりは、何かはじける音だった。仏領インドシナといったけど、フランス人はいなかった。夜着いたから川へ水をくみに行った。ご飯を炊いて食べて、朝また水をくみに行ったらびっくり仰天、五〇メートルぐらい下ったところに何千何百の死骸がありましてねぇ。最期に水飲みに来て力尽きて死んだんだろう。激戦だった。ビルマから日本に帰った時は舞鶴港に入って留守部隊のあった水戸まで列車で行った。日光に行った。兵員解除されて昭和一八年に結婚。一回目の出征は勝ち戦だったけど、二回目は負け戦。

二度目の応召・フィリピンへ

末期になって戦争が激しくなった。二度目の応召は昭和一九年四月。子供がいた。長男零歳。四ケ月ぐらいだった。伍長勤務上等兵。すぐに伍長になった。初めは下関の小月飛行場勤務。八幡に空襲があった。高射砲どんどん撃ったけど、届かんかった。それからフィリピンだった。

行くときは輸送船、駆逐艦の護衛も付いた。何隻通ったかなぁ。並行運航。輸送船、魚雷でやられた。輸送船団マニラからミンダナオ島を目指した。

船倉ひとつは6、7人。下に寝るところはあるけど、下にいたらドアが開かなくなって死ぬこともある。暑いこともあるけど、ほとんどの人が甲板にいた。広いけど人がいっぱい。膝を抱えて寝る。畳一枚に六人。帆柱につかまって寝ている。便所へ行くとでも、山越え谷越え。大きな波がガバーって来るとカラカラってスクリュウが空回り。

対潜監視は全員でする。門司湾を出たらやられる。朝の五時、目ン玉さらにして、魚雷を見ている。監視人は双眼鏡。船は併行、隣の船がバカーン。やられた船から人間の落ちるのが見える。こわかったですよ。海の上からは逃げられん。

攻撃を受けるとジグザグに行く。ブーブーいわしながら（非常汽笛を鳴らし続ける）。駆逐艦も潜水艦を追っかけてどっかへいってしまう。

そんな状態で一ケ月近く。波をザバーってかぶる。たいてい船酔い。マニラまで何日かかったかなぁ。二〇日ぐらいかかった。最初石垣島に逃げ込んだり。潜水艦の入ってきにくいところ。周囲、珊瑚礁のところ。揚子江、スワットー（仙島）の方へも逃げた。そしてキールン（基隆）へ。

台湾で牛の殺し方をみとった。フィリピンに行ってカラバオ（水牛のこと）をつかまえる（略奪する）。最初のうち木につないで、みまねで長い斧。台湾では小さい斧でころっといくのを見たから簡単に死ぬと思っとったが、なかなか死なん。とうとうほかのものに頼んだ。台湾を経てマニラへ。

＊戦時名簿（資料4）に以下のようにある

○七月三日門司港出帆○七月九日台湾基隆港出港○七月十六日マニラ上陸

弱体な飛行隊

フィリピンではネグロス島に日本軍の基地があった。バゴロードという飛行場。そこから北東のハーブリカ（ファーブリカ）というまち。

＊戦時名簿に○八月十九日ネグロス島バゴロド上陸○同日ファブリカ到着。なおネグロス島というのは難攻不落のネグロス要塞がある島として風聞されていたが、じっさいにはそのようなものは存在せず、まったくのデマであったという（山本七平『私の中の日本軍』文芸春秋・一九七五）。

１２３飛行場大隊といっていた。飛行場の守備隊という意味。そこに編入した。部隊三五〇人はいた。師団司令部は佐賀師団（？）。アメリカの戦爆連合三〇〇機でやられた。

＊山本政弘『昭和への遺恨』（二〇〇〇、しらかば工房印刷）によれば１２３飛行場大隊は河野（河拓）兵団右地区隊（隊長弓削大佐）、第4大隊（隊長小見山大尉）に属していた。

となりのセブ島がアメリカに占領された。アメリカ海軍が入ってきた。基地がある。うちの飛行場へは、毎日セブ島から攻撃がある。P38、双発双胴、旋回能力が優れていた（＊ロックヒートP38ライトニング）。飛行場に出て電線張りとか作業していると、一人見つけたって追いかけてきよる。プロペラとプロペラの間に銃があって、左右同時に撃ってくる。たこつぼに逃げて上はかぶせてあったけど、上から見りゃ分かる。あとから横の壕にした。

はじめの頃は高い上からおそった。だんだん低空50メートル、下の方から襲う。ヤシもバァーッと揺れる。飛行機からピストルで撃たれているような感じだった。下からこられると音（飛行機音）が聞こえない。逃げようがない。道の横に伏せとったが、間際を銃撃。

こっちの飛行機は追いかけてもすぐ逃げる。飛行機はなんていう名前かな、おぼえん。四枚ぺらの飛行機。知覧（特攻平和記念館）に行ったら展示してあった（＊複葉であれば96式艦攻か。本来は艦載機）。五機出撃したら二機しか帰ってこん。帰ってこんごとあっ

たですよ。最後は見送るもんもいなくなって、「飛行場大隊、送り出してくれ」っていわれて、見送った。

ある日待ち望んでいた新鋭機が来た。キの84機、それが速い。P38に向かってどんどん攻撃。とうとう撃ち落としたら、敵兵が落下傘で降りてきた。こっちは何回もやられて恨み骨髄。飛行機の翼で切って落とした。たのみの新鋭機も一機か二機しかこんかった。

――陸軍機「疾風」って書いてありました。

ふーん、そういうんかな。

セブは近い。目の前に見える。日本がそこを攻撃したとはきかん。最初から日本が負けると思った。

初めのうちこそ、強気で「敵討ちしよう」。あとは何でも怖い。みな逃げるのが速い。ありゃ軍曹だったやろか。はし・茶碗持ったまま、だまーって（突然）逃げる。あれっと思ったら、すぐブーンって飛行機が来る。ふりかえったらもう逃げておらん。

ファーブリカがやられたとき、300機の戦爆連合（センバクレンゴウ）、上からごま塩をふりまくように、シャーッという音。たこつぼなんか入っとられん。葉っぱでも、一枚でも、頭の上に載せたい。防空壕は穴がひっしゃげてしまう。500キロ爆弾、1000キロ＝1トン爆弾、ビッチャンコになる。かえってあぶない。

艦砲射撃も受けた。逃げても逃げても模型飛行機（＊トンボ）みたいのが、上に飛んでいる。人間の逃げたところは金属がある。金属探知器か何かあって、どこまでも撃ちこまれる。トンボ、撃てば落ちそうなとこにいるけど、もし撃ったら直ぐに迫撃砲でやられる。終いになったら敵飛行機はいつも来ます。こっちは撃つだけ撃ったらおしまい。届かない。

爆弾で耳を失う

下士官で分隊長。班長といわれていた。わたしは耳がちぎれて少しない。右は耳が聞こえん。爆弾の破片でやられた。

本部ったって、民家か野宿か。野宿もしょっちゅう。（飛行場も取られて）とうとう本部撤収。飛行場を使えんごと穴をほがして、命令で山へあがれ。残務整理をしてから、部隊ではわたしの小隊が最後だった

＊「バゴロド派遣隊戦闘概報」（山本政弘『昭和への遺恨』一一四頁）によれば敵攻撃は昭和二〇年三月二九日、後退開始は四月一日。

七人くらいで自動車一台持って逃げたが、雨降りでぬかるみ。自動車のシャフトが折れた。車を捨てて山へ上がりよったら、夜が明けてきた。道はまだ続いていたから、車が使えれば、もうチョット先には木がある。密林に入って逃げられたけど、飛行機にキャッチされた。最後といっても自分の部隊の最後、他の部隊もいる。落下タンク、ガソリン燃料が入っている。わざと落として火をつけて人間を焼き払う。人間のあぶり出し。そこを機関銃で撃ってくる。

朝7時前、アメリカのマーチン軽爆が、七機で爆撃。執拗な攻撃、バッバッバッて最初は機銃掃射、これは岩の陰に入ればよけられた。上にきて、過ぎたと思ったら後ろから撃ってくる。横のもんは死んでいったりする。兵隊にとって鉄帽は大事なもの、それも銃撃で飛ばされた。もう逃げられん。さぁ殺せ。大の字になって寝とった。上から撃ちおるのがわかる。あんまり落ちてくるから怖くなってうつぶせになった。敵機が真上に来て50キロの落下傘爆弾。もし落下傘を付けずにすぐに落とすと、じぶん（アメリカ）の飛行機が危ない。瞬発信管、物体にあたれば四方八方に散る。ふつうの爆弾は上がやられて、ある角度から下は死角になる。この爆弾は死角がない。伏せとってもやられる。瞬発（シュンパツ、「シンパツ」と聞こえる）の穴は深さ一メートル半、周囲は二メートルになる。一メートル先に落ちて瞬間、気を失った。気を失って不思議なもの、大昔のことが走馬燈のように廻った。死んだと思った。耳と肩をかすっていた。

どうとこ七機が落としてしまったら、またつぎの七機が来る。また後ろから攻撃。兵は包帯を持っている。戦友から巻いてもらった。寝たままで包帯。頭を上げることができない。朝から暗くなるまで襲撃。目の先にあるジャングルまで這っていけない。やっと夜になって出て行った。

瞬発信管はこんな大きなかたまり、二〇センチぐらい。あとでみたら木にも刺さっていた。おう、こんなとこに。あぶなかったなぁって。

一週間は治療ができなかった。傷にウジがいっぱいわいた。

（置いて行かれたから）本隊はどこへいったかわからん。二日ぐらい山の中を兵隊一人連れて、二人でさまよった（＊孤立した下士官には兵が1名ついた）。川の真ん中に大きな岩があって、岩と岩の間に岩がはさかって人が入れるようになっていた。そこで一晩寝た。朝になって臭いがする。くさい。川を下った。横道にそれた川があった。高いこんなに急な山があって、川は二つに分かれている。上から滝になっていて、温泉になっている。硫黄が落ちていた。流れていたとこを掘って肩が浸かるようにした。治療はまるっきりできなかったけど、硫黄をつけてだいぶよくなった。あの本（山本政弘『昭和への遺恨』）に地獄谷ってある。そこが、私が行きおったとこのような気がする。温泉があると書いてあるし。

そのときは、食料はもっていない。水辺に「デンキイモ」っていったけど、葉っぱの大きな熱帯植物みたいなイモ。食べたけど、口に入れたら口がふさがらん。えぐうしてよだれが出る。それでも一晩中茹でて食べてしまった。山の中だからたき火はできた。けどそこにも迫撃砲、大きく響いて近くに落ちたことがある。どこで見よるのか知らんけど。

上の方だから助かった。下の方はマラリアにやられる。のどから肩に貫通した人も生きている。

地区司令部のありかはそうこうしているうちにわかる。温泉から、そのあと部隊に合流できた。1週間包帯巻いたまま。血で固まっている。取るときの痛さ。背中の方はウジがわいてどうもなかったけど、耳はほんとうに痛かったなぁ。今でもあの痛みは思い出す。

――種子さん

帰ってきた時、傷跡は葉っぱみたい（ケロイド状）だったけど、いまは一本の線になっている。

＊ウジは腐食部のみを食べるから、自然治癒を助けたというのが中内功の回想である（佐野周一『カリスマ――中内功とダイエーの戦後』）。

特攻隊

（アメリカに取られてから）特攻隊は割にしょっちゅう出た。破甲爆弾、戦車の下に入って自爆。まず独身者から、現役が主に（優先で）でる。妻帯者は一番あと。自分は本部に主におっただけに、命が助かった。山の上から出撃する。志願ではなく一方的な指名だった。殺されるのも同じ。敵陣までたどり着くのがやっと。爆弾が破裂せずに戻ったものもいた。その兵がこのような作戦は損耗ばかりで意味がないって強調した。

恩賜のタバコを一箱。恩賜のタバコはうまい。タバコもすぐなくなって一〇本が五本になり、最後は一本。それで決死隊に出た。気の毒なことだった。生きていたか死んだか。帰ってこんじゃった。

＊推測であるが、妻帯者は生きることへの執着が強く、死を前提とする特攻兵士には不適格とされることが多かったのではないか。

逃げるだけの兵隊

山の中にいると敵味方がわからなくなる。頂上まで行っても攻められる。どうしようもないから降りる。アメちゃんはどんどん上に攻めて来る。日本軍は隣の山を下る。自分たちは四方八方に散る。また上る。ばったりアメちゃんに会ったりする。すぐ近いけど、間に深い谷があって、行き来はできない。夜に行軍、昼は薮の中にひそむ。向こうに、道を造っているアメリカ兵が見えた。いい道。自動車何台通過、戦車何台、人員何名とか一応記録をつけて報告する。自動車には裸のアメちゃんがいるのが見える。こっちはくさむら、べたーっと寝る。むこうには分からない。対面したこともある。遭遇すると両方が一目散に逃げた。

米軍の飛行機が落下傘で食料、兵器を落とす。道作りをしているアメリカ兵のため。中腹以上に食料弾薬、色分けして落とす。兵器は色でわかる。落として谷の方へ。風で流れる。うまくすると流れてくる。拾いに行こうと思って日本兵が待ちかまえている。レーション、罐詰。弾薬はもろうたって、いらない（銃に合わないから）。早い者勝ち。兵隊が走っていく。向こうも走ってくる。どっちへ行くかわからん。あまり近づくと撃たれる。こっちも銃剣を持っているけど、撃ち合いはしなかった。こっちも向こうも死んだらバカらしいから。逃げ足は速かった。それは初めの頃、まだ食料も少しあった頃（まだ余裕のあった頃）のはなし。

任務は小見山部隊と（航空隊）地区司令部（本部）との連絡、本隊は防空壕の中にとまっている。洞穴の中に大隊長（＊兵団長か）以下四〇人くらい。爆風を受けないように、大きな塹壕を何回も曲がって作ってある。だれだったか、えらいさんの名前は忘れたし、あんまりわからん。そこに行って指令を筒の箱に入れて戻ってくるのが役目。部隊に帰って副官、大隊長に渡す。自分では見ない。司令部の連絡に頻繁に行く。歩いて二日の距離。一晩泊まりの二日がかり。地図もなんにもないけど道はわかる。連絡はつく。いま考えるとよくわかったなぁと思う。

行軍というより逃げ回るだけ。月明かりで行動。谷を下って目安がつくところまでは昼のうちに動き、夜間山を上ることが多かった。

火種を持って歩く。火をおこすのはたいへん。太陽が出ていればレンズが使えるけど、ジャングルに日はささん。雨は毎日降る。雨季乾季はわからんけど、午前中はかならず雨が降った。午後は晴よったけど。寒いけど、煙が見つからないよう隠した。ライターはない、マッチは貴重品。湿ってしまう。脇の下に入れて五分ぐらい暖めてから擦る。うまくすればつく（着火）。細かーい木、肌で乾かして火をつける。火種は大事、たいていい持っていきましたよ。石綿とかそんな上等なものはない。燃え残りの木の根っこを、カンカンに入れていく。山の上で夜は寒い。足下に火種を置いて寝た。標高１７００メートルはあったから、寒かったですよ。

タバコは下の方ではフィリッピン人が栽培している。葉っぱがなくて幹だけ。（そうい

う時期だったから）幹を裂いて食べる。（ふつうの）草を巻いてタバコにしたら煙だけ。タバコの茎はタバコの味がする。

食料調達

食べるものはおいしゅうて。ふだんは山の中。上の方は高い。わりによく移動したけど、植物もない、動物もいない。ラワンの大木ばかり、手がまわらんような大きなラワン。最初だけは米があったが、あとはどうしていたか、記憶がない。

歩きながら、なば（キノコ）類、ひらって口に入れてみて大丈夫、これは食える、食えんかが自然に分かる。口に入れて食べられそうなものは拾って、袋にいれた。でも死ぬ人もいた。何でも食べんと。部隊で何もない。下の方はいいけど上の方、何ヶ月もまともな奴はいない。

少し降ってくるとヘゴってヤシの一種。ヤシといっしょ。福岡の植物園に行ったらあって、なつかしいって思った。ヘゴは谷に行ったら固まって生えとるところがあるってわかった。そこまで降りるのに時間が掛かる。実ではなくて上の方、上から50センチあるかないか。その芯をとって、みんなで分けて食べる。ヤシの芯の目も食べられる。生のまま食う。わたしは、軍刀は持っていたけど、あんまり切れん。住民が持っている蕃刀、軍刀と蕃刀を両方持っていく。蕃刀で切り開いていかんと、通れん。蕃刀、これぐらいの巾で反っている。刃が薄くてよく切れる。ナタ。現地人が持っている。それで木を切り倒して上の方を食べる。この本（山本著書）にはおろし金みたいにしてすり下ろしたと書いてあるなぁ。いまなら食べられるようなものではない。このままではダメだということで、山を下りた。

降ってキュウリじゃなくてヘチマを食べた。日本ではヘチマの小さい奴、くさくて食べられん。向こうではおいしくって何でも食べた。草が主食。タロ芋は下にはあったけど一番はカモテカホイ。最初は主食だった。芋は年中ある。

＊山本著書が引用する石塚一夫編『ネグロス島戦記』によれば、広度分散配置による自活、永久抗戦の兵団命令が出されたのは六月四日である。

マンダラガンという山の名前はあの本を読んで思い出した。マンダラガンから降りてきて、広い農地があった。日本人がくるから、逃げていない。芋はないが、芋がら、芋づるがあった。芋づるがおいしかった。山の上にはない。

降りてきて草とかあるところへ。そこでは割と平穏に暮らしおったです。住民は逃げているけど、あまり下までおりて近づけば向こうの兵隊からやられて殺される。にわとりも100パ、200パ、どけんして集めたかしらんけど、しめ殺すのも面倒で首ばチョンチョンと切る。10メートルぐらい走って倒れる。お湯につけて皮をはぐ。

徴発は初めの頃は二、三人で行く。あとからは手分けしてほとんどみんなで行った。現地人がいてことばはわからんけど、ちっとは通じた。トウキビとか一方的に徴発。こっちは死ぬ目に遭う。食うか食われるか。ニワトリは別の人が行ったやろう。

草は、葉っぱを食べる。根はたべない。この（城内住宅）近くにあるヤブジラミという草。若いときはシンキク（シュンギク）そっくり。香りがそっくり。シンキク食べるとそれを思い出す。ヤブジラミ、やっとこの頃わかったけれど、シラミのような種がある。この近くにもある。しばらくはそれが主食やった。

塩がないんで、あまり食べられない。人間は塩が一番大事。塩がないと1週間でもうダメ。山にあがった最初の頃、米は持ってあがったからあったが、塩がなかった。飯盒一杯炊くと三合とか四合。それが一食。塩だけのおかずで食べた。さじにちょっとつける。一回の食事で食べてしまう。塩がなくなって一週間で食えんごとなる。米も尽きたけど、塩がないと食べられん。持たないものがほとんどだった。山にあがる前は塩があんなに大事なものとは知らんかった。塩があれば草でも生で。ちょっと嘗める。すると食べられる。

まだ最初の頃、逃亡した住民のアンペラの部屋。木とヤシの葉っぱ。逃げ散らかして人がおらん。竹筒に何かあった。塩っ辛い。竹筒に塩水が入っていた。それを炊いて塩にして固形にして持っていった。フィルムケースに三分一ぐらいあったかなぁ。宝物。ひとに分けてやる余裕はない。隠れて箸の先にチョット付けてなめた。

一度はぐれて別れ別れの牛をつかまえた。カラバオ。四〇人・五〇人いるけど、全部は食べられない。一度に食べたら下痢をする。干し肉にした。ウジが入る。煮て食べる。ウジが浮き上がるから捨てる。肉のなかに入ったのは取れないから食べますよ。しゃにむに取って食べることはしない。

――ダイエーの中内功さんはルソン島で靴まで食べたということになっていますが。

牛の皮はこんなに厚いんです（3センチ程を示す）。それを干して腰に下げて持って煮て食べたことはある。めったにあることじゃなかった。靴は知らない。

おたまじゃくし。三、四匹。おいしかった。でんでん虫。山の上にはほとんどいない。初めてでんでん虫がおって四、五人で分けて食べた。私は端の大きいところ、初年兵はウンコのところ。下りてきよっとって、トウモロコシの実、四粒、兵隊からもらった。

山から下ってすぐの頃。マラリアになった。行軍中ならほっとかれるけど、停滞中だった。その一週間前に食料収集。バナナの木があった。その辺には余りない。下に行けばたくさんあるけど、下がると危険。カンカンに一杯になるぐらい取ってきてあった。そ

れは一人でいって一人で食べることができた。マラリアで一週間寝た。食わしてくれるもんはいない。自分の分で精一杯。あのバナナがなければこの世にはおらんやった。あとからは部隊でいって集めた食料は全員のもので差し出したけど、その前だったと思う（そのときは自分で確保できた）。下士官であろうと自分でとらな、食料はない。

――将校は？

将校たってあんまりいない。副官と小見山大隊長ぐらい。

だいぶ下に降りた。そこから動かないでいた。停滞中。安全なところで、小見山部隊はそこに陣地を構えた。下にはアメちゃんの宿舎。そこからホンの近くにアメリカの基地があった。一キロぐらいではなかったろうか。自動車の音がブーブー聞こえて、かなり近かった。むこうは日本の兵隊がいることは知っていて、一ヶ月に一回か二回、戦争にきた。こっちはちょうどいいところに機関銃が一台あった。監視が番して撃ちおる。下から上がってくるのは丸見え。アメリカ兵も撃たれたらあわてて逃げた。

フィリッピン兵が主だったろう。アメリカの命令で退却といわれれば退却するだけ。申しわけに出してくる。

だから方々廻れば食料は手に入った。歩き回ればカモテカホイという芋の長い奴。くべる薪の芋という意味。これが一番の食料、現地人の畑にまだそれが残っている。カモテカホイ、そのまま食べられるけど、力がないもんじゃから。土地が硬い。道具もないから引く抜くことができん。掘って取る力がなかった。

連絡任務

自分はしょっちゅう移動。一人を連れて行く。二人で連絡、ジャングルの中、山の上の稜線しか歩けない。ケモノ道というか上だけは歩ける。そこ以外は密林で歩けない。こげん狭い。夕暮れになれば寝る場所作り。下は谷底、一本の木に枝を渡す。とう（藤）で縛る。とうの尾を割って（太さを半分に裂いて）、ロープ。一〇分か二〇分でベッドを作る。一人しか寝られない。各自が作る。一晩とか二晩とか寝た。

これぐらいのケモノ道が馬の背になってつづく。かっちりと馬の背におると、どこで見ているのか、迫撃砲で追いかけられる。じぶんが一週間トイレが出ない。食べていない。米を食べるとき籾殻ばっかり。籾も捨てられん。籾を食べるから、なかでカチンカチンになっていたと思う。朝の六時に一回、また昼から一時まで。稜線は撃たれるから横の木の枝のようなところに乗って排便。尻おっからげて出よるな、とは思うが、ひっこんでしまう。木の枝、兵隊に木で尻ば突っついてもらう。自分ではできん。血も出てきて「出よります、もうちょっと」。それでも取れん。そこへバカーンと迫撃砲、死にまーすバイ。尻ば出したまま逃げる。しぶとくやられた。ほんとにあんな苦しい目におうたことはない。

＊山本七平『ある異常体験者の偏見』一三七頁に、衰弱する兵士には排便の力もなくなるとある。籾のせいだけではなかったようだが、山本政弘著書には籾食で排便不能になると書かれている。

山に入って一週間だけ米があった。それは白米。モミの米はどこか道ばたで拾ったもの、逃げる時、持ってきたやつでしょう。地区司令部に運ぶ途中破れてこぼれた籾。それはほんの一摑みぐらいのこと、それを大事に持っていて、生米で食べた。罐詰が落ちてることもあった。2罐ぐらいチョロッともらった。

あの本には司令部には食料がかなりあったと書いてありますなぁ。

もう少しで飢え死。本部へ行くとき、行きかけ、水くれ、水くれ。夕方戻ってみると、死んでいる。飯盒見たら、これやったなぁ、水くれっていったのは。ほったらかしていかんと、我が身が危ない。

足やられた人は自殺。死なな、しょうがない。

脱走（ポーラ）

山の上まで上がっていた時、このままでは降りないと全部死んでしまう。ポーラポーラ、脱走のこと（離脱）。ポーラしよう。ポーラポーラっていいよったけれど。兵隊はみんなもう出たい出たい。公然と「出らな死ぬ」といった。自分から出て行った。士官にも「私も連れてってください」。みんなバラバラ、勝手な行動。命令系統なんてない。死活に関することだから止められん。

わたしが司令部行った夜に、ポーラがあった。その大隊長が、なんちゅうかなぁ、（言いよどんで）ちょっとひどいこと、さした。最後の出撃のために食料が一合、大事に取ってある。生きるか死ぬかの時の食料、鉄兜の中に一合だけ、それをなぜか部隊長が引き上げてしまった。どういうつもりだったか、自分が食べるためだったか知らんけど。みな腹を立て騒ぎになった。これ以上おったら死ぬ、米も引きあげられた。飢え死にしかしょうがないということ。

＊日記（資料3）によれば五月二九日か。この五日後に広度分散・自活命令が出た（前頁）。また米は山本七平『ある異常体験者の偏見』（文芸春秋、一九九七）にある「末期米」のことか。

司令部に連絡にいっとる晩、みんながポーラした。帰ってきても同年兵、下士官、見習士官、一人もおらん。私の親友たちがいなくなっていた。兵隊も連れて二〇人か三〇人が出た。部隊は錯乱状態。ショックを受けた。出る時はいっしょに出ようやって、約

束していた。だーれもおらん。わたしも隔離されたような状態になった。また逃げたら困る。

見つかったら引き戻される。兵は殺されなかったけれど、(責任者)下士官は殺された。何ヶ月かして山を下り始めたら、偶然脱走したものにあった。「責任は問わんから帰ってこいよ」。(説得されて)ポーラした兵隊が連れ戻されて帰ってきました。合流して一日、二日したら、(その中の)下士官がもうおらんごとなった。私はその日食料収集に行きおったら、下の方で弾の音がしたから、ありゃーっと思ったけど。そのときに殺されたんでしょうな。副官が殺したという話だった。

もうちょっとで終戦という時だったのに。終戦間際。

――その下士官の名前は?

忘れたけど思い出してもいえんでしょう。家族のかたがもし見られたら。

二人ほど、それがいつ殺されたかはわからん。見習士官もおった。(その人が)お願いします。わたしも連れて行ってください。わたしもそう思っとった。このままでは死ぬだけ。でも一日ちがいで、責任者で(として自分が)処刑されたかもしれん。

わたしがちがう山に行ったら(また別の)二人いるのを見つけた。一人は銃を持たない。一人は銃をもっとる人。(銃が足りないから)一等兵の方は銃を持たない。二等兵で年上の人、経験のある年上の予備兵が銃を持った。階級は下。二人とも自分の部下。連れ戻せばどうなるかわからん。逃がしてやった。見逃したわけです。逃がしてやるわけだけど、別れる時はいやな思いですよ。今生の別れ。昔のことを語るのはいやなもの。名前は覚えているけど、階級が上なのは吉岡(仮名)、下が山本(仮名)だったかな、それは書かない方がいい。吉岡が自分は帰らん、どうしても出て行く(部隊に戻らない＊処刑を恐れたのだろう)。(部下の)山本を説得した。じゃぁ残ります(復帰はしない)。あとで出て行きますから。そうか、素手では危ない、お前もいっしょについて行ってやれ。その二人は合流はせんかったけど、収容所でいっしょになった。生きていた。一度城内住宅にたずねてきたことがある。

……

種子さん――終戦直後、同じ部隊にいた八巻(仮名)という人を訪ねたことがある。朝倉の人、「自分は先に捕虜になって恥ずかしい。分隊長はやられとったけど、お元気だったから大丈夫ですよ」っていわれた。それで一安心はしたけど、そのときは泣きましたね。でもそのひとはずいぶんばつが悪そうでしたよ。肩身が狭いって。

小林さん――八巻は同郷の補充兵。わたしより五つか六つ年上。そのひとは吉岡や山本より、もっと前、ずいぶん前に投降していた。俺は帰ってから一度も会っていない。

……

加藤上等兵(仮名)というのは(仲が良くて)ずーっといっしょにおった。土手の町の弁護士の娘婿。山で逃げてる途中、わたしの同僚の下士官がマラリアだった。寝たまま動けない。兵を付けて二人だけで移動することになった。その兵が加藤。一ヶ月以上経って、その兵隊だけは私の所にきた。「誰々下士官は死なれましたので、私一人が帰ってきました」。それがやせ細って、もうみるからに完全な栄養失調だった。下士官は兵といっしょに寝てはいけないという決まりだったけど、親友だからいっしょに寝た。民家のあばらや、住民が逃げたあと。夜中にむずむずする。隣で冷とうなっとる。それでシラミがみな私の方にきた。

シラミは友達みたいなもの。シラミ取るのが楽しみ。もっと下って、川があって、初めて川で身体を洗った。ふんどしに付いたのを洗い流した。ふんどしで顔を拭いた。石鹸もないし。風呂なんてとてもじゃない。頭もひげもそのまま。

ジャングルの中は日が当たらない。山にあがって足を伸ばして寝たい。日の当たるところへ行きたい。平らな道を歩きたい。その三つ。それがあれば幸福なことはないなぁ。

加藤上等兵の所へは戦後一度たずねた。姪浜だったかな。同郷で、(小月に)奥さんがいつも面会にきていた。あの日記(＊面会記事、一九頁参照)のとおりで、うちといっしょ。わたしの横で死んだ。(そう報告するはずだったけど、生存を信じる家族に対し――)とうとう死んだとはいえなかった。

投降　あの本をみて、わたしがいた山はシライ山だと思った。そこからマンダラガン、そこが捕虜になった山と思う。ファーブリカに下りた。派遣になってシライの方に行った。いよいよ敵が上陸するなという感じ。自分が死ぬ時はみなといっしょに死にたいといって原隊に返してもらった(手帳参照のこと)。

山本さんとは同じ部隊におったんじゃないかなぁ。あとから知らん若い士官がおった。本に野戦病院のことが書いてあるけど、そんなものあったのかなぁ。初めからなかったような気がする。

最後は体力だけでなく知力の方もおかしくなっている。小便がしょっちゅう出る。下半身、前を出したままみな歩いていた。私もそうだったもの。前にチンチン出して、夢遊病者のようなもの。

飛行機はそれまであんまりこなかった。八月の十四日に、あとから思えば終戦一日前の日だったけど、やられよった。それで何人か死にました(＊一三八～一三九頁参照、八月十三日か)。

八月一五日のことは知らなかった。（敵の）飛行機が飛んでこんようになった。おかしいなぁ、けど連絡がつかん。九月に入ってから停戦協定を結んだという情報があって、それならと投降を決意。大隊長は健在、武器は山の中に埋めてしまった。杖がわりに使っていた日本刀（軍刀）とかそういうもんは（アメリカに）やったけど。停戦協定といってもいつかは殺されると思っとった。生きて帰れるとは思わなかった。帰れるという感覚はないけれど、山の上でも食べたい、生きたいという気持はあった。

日本が負けたことは投降して初めて知った。

投降したときは四十何人、五十人おらんやったろう。本隊も分隊も一緒。自分の大隊は三五〇人だった。九月の二日と思っとったがなぁ。

……

種子さん――終戦後、西中洲の公会堂。引き揚げ者、兵隊の名簿が張り出してあった。

レイテ収容所　小林正夫　九月四日

九月四日と思う。（生きていると確認できたから）あんまり心配せんやった。

……

投降したのは上の方だから連絡も遅れよう。二日に投降していても下で知ったのは四日になったんだろう。

そして収容所　大隊長はいっしょにいたからよく知っていますよ、投降した時、副官もみないっしょだけど、そのあとはわからん。収容所におったかどうかもわからん。バラバラにされたから。

バゴーロード、腹が減ってしょうがなかった。足が腕ぐらいに細い、栄養失調。トラックにあがり切らん。その力がない。町に入って護衛兵が撃ちながら走る。フィリッピン兵や住民が日本兵に危害を加える。空砲撃ちながら何台も連ねて走った。監獄に入れられた。監獄って、とりあえずの刑務所があった。つかまってバゴロードの飛行場を見た。撤収の時、チャカチャカに穴をほがした。どうにも使えんはず。一週間もせんうち飛行機が飛んできたからヘンだと思った。鉄板を引いてあった。使役で行って見た。石割の罰って、飛行場の端の方を刑罰として石と石を割る。あの本にも書いてあった。

フリーゲート鑑で各島に散らす。まとめない。部隊のものはバラバラにされる。あっちに行ったり、こっちに行ったり。舟に乗って何ヶ所も移動する。船に乗るときじゃぶじゃぶするつもりで、褌一つで頭の上に荷物。裸足で渡っていったら、海岸まで来て前にパカっとおりる（びっくりした）。部隊はバラバラにされて、小見山大隊長もそれ以来行方しれず。

待遇はよかった。水筒の中にパカっと入るカップ。重湯が少し。殺さるるぐらい少しだけ。徐々に増やしてくれた（＊急に一度に多くを食べて兵隊多数が死んだことは大岡昇平『レイテ戦記』）。タバコはアメちゃん、吸い殻を捨てるのを待ちかまえてぱっと吸った。

レイテ収容所、頭文字がKならKのものばかり残される（むこうが悪いことをしたのはKがつく人間だったといったのだろう）。現地人が収容所に来ると、立っちょって、こっちがくるくる周りを回る。現地人何人かがこの人だという。ホントだということになったらその先はわからん。どうなったか。

TがついていればTのものばっかり残される。わたしは小林だから、Kのつくものということで残された。Kのつくものはたくさんいる。ほかのものは帰る。戦犯ってそういうもの。処刑されたものは何人かいた。（名前は）覚えとってもいえんねぇ。自殺した人もいる。そのときの壁新聞の写真を私が写している。曙光新聞、収容所の絵も描いてある。

＊佐野周一『カリスマ――中内功とダイエーの「戦後」』が引用する片山弘二の回想に依れば、ヤマダ、スズキ、サトウ、タナカというよくある名前の者が残されたとある。中内また大岡（昇平）のような少数派の苗字であれば、早期の帰国が認められたという。ただしフィリッピンでは苗字全体を記憶する住民よりも、頭文字のアルファベットで記憶する住民の方が多かったのではないか。

〈曙光新聞より〉

比島女の陳述は出まかせ

カモテス諸島・事件の訊問終わる

カモテス諸島の一事件について一〇日、三名の比島女が来所、これに関係ある通称リロテン部隊の取調べが行はれた。

この取調べに於ける比島女の陳述は出まかせで、例へば同島に於て事件の起こった前日その島を去った者を捉へ、「この男が私の隣の人を殺すのを見た」と取調官に訴へるやうな始末だった。取調を受けた人々によってこれは強硬に否定されたが、米軍では告訴の手続きをとることになった模様である。

当日訊問を受けたリロテン部隊の某氏は

「土民の申立ては少しの真実も伴はないものでしたから、私は徹底的に否定し米軍係官には三名の女の述べるところが事実に相反してゐるものだといったのですが、あまり関心が払はれるようには見えませんでした。多分告訴されるのだろうと思ふので、マニラに行ってからは強硬に論争しつづけずにはおきません」と比島人の申立てに憤慨して語った。

＊山本七平『ある異常体験者の偏見』（一九九七・文芸春秋社）七三頁によれば、法廷で娘が強姦され殺されたと証言する母親は、初めは別人ではないかと思っていても、証言の過程で場面を復原するなかで感情が昂じ、興奮状況になり、「この男だ！」と断定し気絶する。同時に傍聴人から「ジャップ・ハング」「パターイ（殺せ）」「パターイ」が連呼される。告発の数だけ絞首刑が要求され実施された。部隊の違い、年齢・場所の違い、つまりアリバイも無関係であった。爆撃死の方が、まだしも納得できたであろう。収容所・法廷も生死を偶然で分けていく戦場の延長であった。せっかく終戦まで生き延びた兵も、戦死した兵、または悪質な兵に代わって処刑された。悲惨に過ぎる宿命であった。しかしフィリッピンにおける日本戦死将兵の数・四七万六千人の倍以上、百万人のフィリッピン人犠牲者がいたという現実がその背景にあった。

＊この新聞は『レイテ捕虜新聞』（昭和50年・立風書房）、『曙光新聞縮刷版』、『レイテ島曙光新聞物語』（ともに昭和55年・彩光社）として刊。

終戦後一年間、昭和二一年まで残ったのはそういうこと。使役に出る。飛行場整備。食堂のご飯作りが一番いい。暴力団関係だったら――（メモできず、後日山本政弘『昭和への遺恨』に般若組という暴力団組織が収容所を支配していた旨の記述があるのを知る）。

般若組というのは覚えんけど、うちの中隊に「おじき」というのはいた。おじきは入れ墨をしている。別の中隊に「親分」がいた。「あにき」もいて入れ墨、幕舎の中で、針を束ねて「おじき」が彫った。組に入った者は入れ墨、針は現地人との交流で入手はできる。炊事当番が使役の中で一番いい。食料がないから。炊事当番になるのが望みで最初に入ってくる。しばらくしよったら「あにき」分が因縁を付ける。それがまたうまい。飯に虫が入とったとか。もう一人いる係のものと「あにき」がケンカしたり。（初めは排除しようとしたけど）しまいには入りこんできた。しばらくしたら「おじき」が入りこんできて床屋を始めた。カミソリ切ったり脅したり。にらみをきかせた。テントのなかでバクチ、麻雀をやる。タバコの1カートン（聞き取れず）。仕事をしない。初めはいざこざがあった。あとはふつうにやっていたから、そんなに害はなかったけど。花札はいっしょにやった。麻雀は夜通しになるからやらん。

＊「おじき」という人物は山本著書の36頁、133頁にもでる。『曙光新聞物語』32頁では「S親分、I親分、Sおじき」として登場する。「レイテ島曙光新聞」（縮刷版）（彩光社より刊行）には新聞部顧問あるいは演劇部として彼らの名前が記されており、おじきは3中隊顧問鈴木氏のようだが、もともと捕虜になった時の偽名らしく、『レイテ島曙光新聞物語』一六五頁・山本義民氏の報告に、偽名を使っていた坂本親分が同村出身者である自分にあったとたん、泣きべそをかいたような顔になったとある。この報告には坂本親分は後に先祖の墓の前で首つり自殺したと記されている。ほか山本政弘氏が偽名にちがいないとした森氏の名前も勧進元（坂本氏の後任）として新聞縮刷版に見えている。

――曙光新聞にスズキとある人じゃないですか。

鈴木、ああそういったかもしれんなぁ。ケンカは多かった。

使役はものを燃やすこと。レイテ島は大きい。大きな倉庫、被服廠の中に靴だけの倉庫もある。レイション、罐詰、ビールの倉庫。倉庫の中のタバコ、上等のいいタバコだった。刻みタバコ、紙でくっつく。それを現地にはなすと、現地（地元）のタバコが売れなくなる（現地産業が駄目になる）それでみな燃やしてしまった。一週間は燃えた。兵器廠に行って兵器も捨てた。銃器も捨てよった。水陸両用車でカンカンを捨てに行ったり。限りなく捨てた。戦車とかも捨てた。戦功のあった戦車、そういうきたないものは残す。新しいものを捨てる。使役は燃やす役割。何でも捨てる。

監視がいるわけでもなし。ビールの倉庫に入って真ん中を掘り下げる。中側から外に出して、見つからんからビールを飲む。酒の肴も交換して。捕虜たって呑気なもの。

アメリカの兵隊は数を数えるのが下手。ワン、ツウ、スリーで肩を叩いて順番にいってエイトぐらいからおかしくなって、30ぐらいで初めからやり直し。日本人なら整列させて、軍隊式、四列縦隊、番号1、2、3――、四十の三欠で三十七、すぐに分かる。食料も日本人が計算すると、余らない。将校炊事、ドラム罐単位で作る。アメリカ人が計算するとドラム罐、一、二杯は余る。日本人が計算すれば余らない。倉庫でもフィリッピン人の監督はすぐにクビ、実質日本人が監督するようになった。アメリカ兵でも黒人は親切だった。食べものでもいくらでも多くくれる。

＊黒人のこうした行動は http://www.w2.

比島女の陳述は出まかせ
カミテス諸島事件の訊問終る
杉山長官さん講談聴聞
「石川の巻」

写真3　曙光新聞　収容所にて小林さん撮影

mozcom.com/~hoshino/gakutohei4.htm 本林猛「セブの学徒兵」にも詳しい。

軍属に朝鮮人も台湾人もいた。朝鮮人は直ぐにいばり始めた。立場が反対になるところっと変わる。朝鮮を施政した日本人がよほど悪かったんだろう。台湾人はよかったですなぁ。

あとから写真班に入った。そうしたら（幹部待遇で）自動車で送り迎え。一年近く抑留。アメちゃんのプロポストマーシャル。憲兵司令部といったと思う。そこの司令部にいて写真の仕事（技術を持つ有用な人材として）。写真機渡して、収容所のなかみんな写してくれって。ずいぶん寛大な国ですよ。初めは軍曹が対応、交替してあとからは兵だった。

みんなが次々（日本に）帰るのに自分だけ帰してくれない。仕事なんか何にもしない。そのときは英語でしゃべっていた。英語で喧嘩もした。敵性語で覚える気もなかったが、一年二人で仕事をしているからしゃべりますよ。いまはハローぐらいしか覚えていない。

曙光新聞の影山さんという名前はこの本（山本著書）をみて思い出した。朝日新聞の大阪にいた人。同じ中隊ではなかったけれど（同じ新聞社勤めだった）。幕舎（まくしゃ）でわりと親しくしてたんです。撮った写真もあったと思う。帰ったら会おうっていってたけど、いつの間にか忘れてしまって。

＊影山三郎氏は朝日新聞学芸部長時代に「ひととき」欄を創設、朝日ジャーナル編集長などを歴任。故人。

絵を描く人もいた。こんな大きな壁画を描いて。米軍の兵隊の似顔絵も描いたりしていた。三木さんといったと思う。新聞に挿絵を描いたりとか。将校とも親しくて、用紙が手に入りやすかった。それで新聞にも描いていた。その人が絵を描いているところの写真も撮ってあった。

影山さんも三木さんも親しかったからそうして撮った。ふつうは兵の写真までは撮らない。でも影山さん、三木さん以外、ほかに人はまるで覚えん。名前が出てこない。周辺の人も知っているはずだが。どうしてかな。部隊もみんなバラバラ、なんども収容所を変わった。何カ所も移動。本にニッパハウスとか書いてあるけど、おぼえん。

「曙光新聞」（縮刷復刻版）、あれをみよったらほんと、思い出しますねぇ。身近にいたあの人じゃないかなぁ、って。この本を書かれた方（山本政弘氏）もわりに近くにいたと思う。戦犯は同じ幕舎に入る。二列に並んで、三〇人ぐらいだったかな。手前に食器棚があって。その向こうに床屋があった。その例の「おじき」がやっている床屋。新聞はその横にかかっていた。セブの海軍からの艦砲射撃を受けて逃げちらかしたことでも、トンボみたいな飛行機の話でも書いてあることが自分の体験と全く同じ。私もびっくりして、服部先生に紹介してもらって、いちど話もしてみたいなと、家内にも、いってたんです。亡くなられたんですか。

――この夏でしたから、ほんの少し遅かったですね。七月二十八日の朝日新聞（新人脈記）に載ったばかりでたった半月後、残念です。

帰国

フィリッピンからカップ、スプーンを持ってドングロス（袋）、筒になったものを入れて船に乗った。

輸送船に乗っているとき、ほんとうはどこへ連れて行かれるか、わからんかった。伊勢湾手前、みんなが富士山だって。遠く向こうに富士山が見えた。みんな泣いた。日本に着いたなぁ、生きて帰れたなぁとはじめて思った。生きたい心はあったから。

名古屋について電報を打った話はこの前した（3頁参照）。

……

種子さん

――私も急いで博多駅まで行ったけど会えなかった。おじさんがカメラ店。そこに行ったら、いた。一年程、生死は不明。さっきの影山さんが朝日新聞に生存者の名簿を載せてくれて、それを姪が知らせてくれた。それで生きていることはわかった。

＊『曙光新聞物語』57頁によれば昭和二一年一一月九日朝日新聞に影山特派員報道の東京都出身者分・レイテ島生存者名簿が掲載されているから、その前後に九州出身者が掲載されたのだろう。

そのあと、西中洲の公会堂、いまも文化財で保存している。あそこで収容所の名簿にあったから安心はしていた（既述）。

このひとが城内住宅に入ったとき、まわりに草がいっぱい。これだけ草がありゃ生きていけるっていった。収容所で体力はすっかり回復していた。昭和二一年一二月一三日、和歌山の南海地震がおきた日。雪が降る頃に表で行水したぐらい。肥えていた。

……

城内住宅は電気もないし、水道もない。トウシミ（灯心）を使った。油のろうそく。油で皿が黒くなる。満州でも長く使いよった。共同水道はあった。井戸があったのは鈴木さんのとこ一軒、でも山みずがあった。土手の向こうの大濠側。大きな穴がある。きれいで冷たい水。歯を磨いたりした。電気は九月頃にきた。

新聞社に勤め始めたらマラリアが再発した。あれは再発するもの。キニーネがよく効いた。中支から帰った人にもお薬をあげた。

フィリッピンの戦友が訪ねてきてくれたことはある。その写真がこれ。でも戦友会は

写真4　最初の城内住宅建物：小林さんを訪れた戦友たち

一度もない。現役の曹長でわたしたちにはいいけど、兵にものすごう厳しく当たる人がいた。戦友会はやっても、あれは呼ばんって。戦友たって、だいたいいないし（生還できたものが少ない、戦友会だと全員呼ばなければならないからやらなかった）。大隊長の消息なんかも知らない＊投降までは一緒だったが、収容所では見ていないとのこと。生還できなかったのかもしれない。

軍人恩給をもらう資格は一〇何年でしょう。内地は一年、満州は三年、外地は四年で換算される。私は昭和一四年から一七年、一九年六月から二一年、かなり余ったぐらいだった。けど取りにいかんやった。命の助かっただけでいい。もらう気にならなかった。たくさん死んでるでしょうが。助かっただけでいい。打ち切り寸前、勧めてくれる人もいて北九州で証明書。軍隊手帳をもらった。耳が切れている。外観はどうもないけど耳が聞こえん。傷病加算をするといわれたけど、たばこ銭ぐらいだからいいって断った。でも（耳の損傷は）容姿に入る。もらっていればそっちが大きかったらしい。

――バゴロード空港はいまネグロス島の中心空港らしいですね。

そうですか。わたしも老後の楽しみで世界旅行にあちこちいった。けどフィリッピンもネグロス島も、なんか行く気がせんのですわ。手帳も実はずーっと見たことはなかった。見るのもいやだった。（妻が渡したから）何が書いてあるか心配だったけど、そうへンなことは書いてないみたいだった。

――あれを読んで涙が出たと院生がいっています。

そうですか。

資料3（軍隊手帳・日記）

昭和拾九年四月二十二日
山口県厚狭郡王喜村小月
西部百五部隊入隊
留守部隊
千葉県東部第百一八部隊（第七飛行場大隊）

一九、五、九

九の日は我々には幸福の日と云わねばならない。妻も満足したことだらう。俺も覚悟が出来安心して戦地に行ける。泣いて喜んだ妻の顔が浮かんで来る。坊やも喜んで居た。坊やを抱いて寝たときは夢のような気がした。

五、一八

妻面會、四回目　あまり強く来るなとも云えず、あまり来れば未練が残ると思いても、妻の心を思えば可哀想でもある。今日は、でも嬉しかった。坊子の赤坊大會でも一等になった。面會斗（ばかり）で何回も同賞状を見た。妻をほめてやりたかった。

五、二一

妻面會　五回目　無断で来たので怒つて文句云ったが、悲しそうな顔をすれば可哀想になる。久し振りにイチゴを喰べ、うまかった。一等の坊子は日に日に大きくなって来た。努力甲斐あり藍外を貰ふ事が出来た時の嬉しさ。村山（仮名）ももらった。共に喜こび、帰る時に嬉しさは――

久し振りに戦果に落付き夢の様な気がした。翌日山田の兄の所に行き、山田宅で別れの食事をした

母の別れの際の涙顔が目に浮かんで来る。最後の別れになる様な気がした。

六月二十一日

面會も出来ぬと思って居たが、幸に再び出来、嬉しかった。もう絶体出来ぬ筈の所を出来たのだからこんな運の良い事は無い。どうして我は運が良いのだらうか。妻もとても喜んだ事だらう。昨日来た妻を一晩とめて今朝七時頃に出て内密で宿に落付く事が出来た。こんな良い事があろうか。ゆっくり落付。

坊子のいたづらが、とてもひどくなって居る。可愛い、とてもうるさい。家族的に親

写真5　出征する小林さんの壮行会（国鉄博多駅頭にて）

子三人ゆっくりと落付いたのは、入隊以来始めてだらう。正幹が頑健に育って居るのが何より楽しみ。

船中雑感

輸送船の中は予想以上に一杯。東山丸、七千八百瓲船としては優秀船にて、何回も魚雷を受けて今まで無事に来た運の良い船だそうだが、何しろ一杯、二段目の一番下だから暑い。一坪に十七名だから到底寝る事は出来ない。座るのがやっとだ。暑い事、言語にてはあらわせない。甲板にても一杯、五尺の寝場所探すに苦労せねばならぬ。他方で畳の上でゆっくり寝て居られるのは何より幸福な事と思わねばならぬ。こんなに落ぶれ様とは思はなかった。

七月の十二日だったかマニラの港直前、午前七時十分突然にガーンと云ふ音響にハットシ前方を見れば二百米と離れて居ない前の僚船、眞黒に煙をはき黒々〳〵内に片向いて居る。各船團は舵を無くせる船の如く右横左行して居る、哀れ僚船は二十分の後沈みぬ。多数の戦友と、もに我等唯茫然と見送るのみ。戦友の一人でも多く援からん事を祈って居る。

七月二十一日

一ト月振りにペンを取って居る。思へばくしき縁と思って居る。二十一日マニラ着以来数日無事着いた。身をかえり見て感ガイ無量、どうしてか今日煙草を止める決心をした。金はあっても物価が高く、到底我等の手におえず。でタバコと交換ならばとてもやすくなるので、正幹の子に良いものをと思って居るが、どうも止められるかと思うが、不思議に因縁の日だから大丈夫

七月二十三日

相変らず頭の中は煙で一杯だ。今日は出発の日だ。

又々嫌な船に乗る為めに阜頭に来て居る。昨日は兵站に行き、途中にて飴玉を買った。十圓位も買ったが兎角一ヶ十五戔(銭)少ししかない。久し振りにて糖分を補給して満足、それから下士官四名で六階建ての日本人食堂に入った。フライ飯一、三円、ウドン一、一七〇戔也。普通ぢゃ食へない。

タバコタバコ今から死ぬかも分からぬ俺がタバコやめる事もなかろう。色々なる雑念が湧き思わず手がタバコに行く。止める事はむつかしい。

第三日目（禁煙3日目）

タバコのケースの中に入れて居た正幹の写真ともうお別れだな。タバコ喫ふ度に見、朝晩オ早ヨウ、オヤスミの声をかけて居たが。今度は皆手帖が友。一緒に入れる様に仕様か。

七月二十四日

少シの波だが船は木の葉の如くに揺れる。船名は御月丸、五千トン位だからそう小さくもないのだが、どうも揺れる。左に古戦場、コレヒドールの要塞を見、感無量。タバコは相変わらず止めて居る。食後は相変らず思わず、手ののびて仕様が無い。其の時はあわてゝ此の手帖を出し書いて居る。やっぱり危険な航海だ。何と云っても海の上は嫌なものだ。本日より対潜監視に勤務して居る。少々疲れるが船室に居るよりましだろう。今迄やって来た苦労、今からの苦労に比べほんの少かなものだろうが。やっぱりこんなつまらん事は書くまい。俺は働けば良いんだ。

七月二十五日

毎日の様に降って居た雨も乗船して依(より)も幸にして降らず時々のスコール位で大助り、相変らず両側に美しい島々を見ながら航海して居る。綺麗な島ばかりでこんな所に農場を持って住んで見たいものだ。十隻の船團とは云え小さなボロ船ばかりセイ〳〵六ノット位のものだろう。昨日セブ港到着の予定、それから十八時後には任地ネグロス島パゴロドに向ふのであるが、一日も早やく陸をしっかり踏みしめたいものだ。

煙草は堅く禁煙して居る。若し俺がこの侭々死すとも俺は貴い事をして満足して死ぬことが出来ると思ふ。結果は何も得るものは無くとも俺の我欲に勝ち得て正幹の為め何かをやれる。嬉しいものだ。故郷の妻子の事はあまり口にせぬ事に仕様。出来る限り忘れて働きたい。思い出せば出す程自分自身苦しむばかりだ。正幹よ。笑顔が瞼に浮かぶ。

写真を見よう。マニラ！浅き因縁（ニヒニン）の都ありしが思い出深き都ヨ。トンド小学校に居し数日、窓辺に戦友と共に依り、色々と語りし――

諸々の雑念湧き出で我が心、千々に砕けむ。なれど我、堅く誓えり、出発の折、妻に誓てし言葉、永久に消えざるべし、苦しき心、行動は秘せるとも、我が精心にいつわる事のなんと、かたき事よ。我々若人に南国の都マニラ！はあまりにも強く感ず。

一九、七、二六

無事なる航海を神に感謝しつゝペンを取る。

故郷へ送るの記

拝啓、美しい風物、南国情緒豊な風物に囲まれ、見つゝ心せくペンを走らす。無事についた。相変らず元気だ。やっぱり俺の頭上には神が居られるんだと思った。喜こびの胸に一杯漲って大地を確つかり踏みしめて居る。なんと嬉しき事よ。当地相変らず暑き日続き居れど、再度の事とて大して感じない。体のみは大丈夫。安心して呉れ。お前達は元気でやって居るか。元気でいたづらして居る正幹の姿が浮かぶ。因幡町も変り無いか。近々を知らせて呉れ。楽しみにて待て居る。俺は去る七月二十一日、偶然にも禁煙を思い立った。偶然だよ。比島は物価高く、到底兵隊の給料にては品物買い求める事は出来ず。煙草となら相当なるものと交換出来る。正幹になにかと思って思立った分けだ。俺は命無きものと覚悟したけれど今の俺の気持を父の気持もなんとかして坊子に伝えられぬものかと思って居る。

本日比島第二の都セブ港着。

ネグロス島バゴロット到着は何日ぞ。

二十七日　晴天

此処二、三日腹をこわして弱った。入隊以来始めてだ。乾板を抜きにしたら足下がふらついて仕様が無い。今日も「ゼブ」港碇泊。案外感じの良い町で、ヒリッピンでは第二の都会だそうだ。何処でも良いから一日も早や上陸したいものだ。今日は福間兵長と故郷の色々なる事を語ったが、語った後はとても寂しいものだ。

二十八日　七月

セブ港上陸。埠頭にて身体の洗濯をし、久々にて清々しい気持ちになった。陸地を踏んだ時の気持は格別。セブの町に進出。糖分補給の為。物資は豊富。ゼンザイコーヒー（汁粉）万寿等多羅腹詰込んだ。純綿のコーヒーは胃のふを喜ばして居る。甘味品を腹一杯喰べたのは何年振りか。少々高イがやっぱり砂糖の産地だ。

我々は埠頭にてドラム罐の積替をやって居る。眞黒な女のクリー、皆スカートでモダンな格構して働いて居る。皆愉快な奴等でダンス等してキャ〳〵賑いで居る。奴等の生活はみじめだ。若い娘が綺麗な奴も居る。敗戦国の一片が見られる。リズムの国ヒリッピン。若い娘達は輪型になって手を叩き面白く賑いて居る。埠頭の風影はのんびりして居る。

七月二十八日

故郷に送るの記

今セブ港に入港し二、三日碇泊して居る。埠頭の風影を知らせよう。戦敗国の若い娘、否、共栄圏の若い娘達は埠頭にて眞黒になって働いて居る。皆愉快、朗らか、休みの時は皆輪になり歌を唱い身振り面白く踊って居る。ドラム罐上にての楽しき宴を張って居る。彼女等は幸福か、否、幸福な事はあるまい。おそらく昔の様に自由な美しい暮らしではあるまいが。悲観を知らないのかだが、苦しい事は確かだ。俺もそんな気持ちになり愉快にやって行き度く思って居る。

大いに働き大いに出鱈目をして来るが妻に顔向けが出来ぬ事はせぬ。無心な正幹に済まんが、若しこれより先、眞違つた事をした時は必ずこの手帖に書き込めよ。

八月（七月）二十九日　晴天

今日も嬉しい下船。埠頭附近の合図の木葉陰にて寝て居る。とても迚も良い気持。横に枝のグット張った大木、たくさんの小鳥が囀り乍ら飛廻って居る。我は懸命に書いて居る。ふか〳〵雑念が去らず困って居る。船内と今では天国と地獄程の差があるだろう。南国は良いとも思ふ。

今日すでに埠頭でのある話を聞き、血も少しで（も）湧かした事を深く恥じる。こんな時に坊やの写真を見拝、不思議にすーと消え行く。残念乍らお前の写真ぢゃ駄目らしい。若少し綺麗な写真があればどうか知らぬが今の分ぢゃ具合が悪るい。任地に着いたら綺麗な写真でも送って貰ふか。見合の写真でも撮っとけ。

印象深きセブの港よサラバ、懐かしの埠頭よ

情熱に夕暮の中の埠頭の思い出が脳裏を廻って居る。夕陽に真赤に輝いて居るセブ港よ、左様奈良。明日はバグロッド着の日。

本日無線室に同盟ニュースをキャッチしたが、タイ国のビプン内閣が総辞職した由、

世界戦局は如何成るか。兵隊の頭にも、一部不安が掛って居る事は仕方が無い。

七月三十日

遂に我等の任地ネグロス島バゴロードに到着セリ。眼前に雄大なる山が永い裾を引いてせまって居る。良い所らしい。声を大にして快やを叫び度い。

兵隊はもう疲れ切って居る。早やく上陸して思い切り足を伸したいものだ。此の辺はもう雨季は過ぎたらしく、暑い天気が続く。南国特有の綺麗な雲が山の中腹をかすめて右に伸びて居る。

八月二日　晴天

バゴロッドを目前に見ながら厭な船内に何日まで居る事やら。皆んな兵は少々やけ気味になって居る。人間のドン底の様な生活。五尺の身体を眞直に伸して寝れるは幸福なり。此んな生活に兵の心は一日々荒んで行くのはどう仕様もない。自分も昨晩は悪い事をした。だが別に悪い気もしなければ悔ゆる気もない。

と云ふのは一昨晩チョットした事から、自分の巻脚絆を失した。腹が立って仕様が無い。其の翌日出てきたのは出たが、どうも腹の虫がおさまらない。戦友の加藤（仮名）に夜中起こして貰って、二人で行く。加藤は船員の食器をどうせやるのならと思って二つやって来た。迷惑して居る事だらうが宥して呉れ。早やく下船さして呉れ。でないと兵隊の気持は変にすねて行くばかりだ。

此の二、三毎日砂糖ばかりなめて暮らして居る。水筒の中にも朝の味噌汁の中にも砂糖ばかり・朝から晩までなめて居る。少しでも良いから家に持って帰ってやり度い。喜こぶ事だろう。村山が船員からウイスキーを三十円で買ってきたので、呑んだ。久し振りだったので、迚も美味かった。菓子も喰べた。〇〇も手に入った。今日はよい日だ。気味が悪い位だ。

八月九日

久し振りにてペンを取る。忙しかった為めに、待ちに待った上陸は五日、上陸以来多忙な日ばかりが続く。愈々任地ネグロス島の土を踏みしめた。上陸すれば又危険。兵隊の飯を喰って居る間は生命の事は考えられんだろう。第一分隊の分隊長大木軍曹殿、八月一日付を以て曹長へ進級、それで自分が分隊長となった分けだが、多忙な時に分隊長をやらされて困った。でも皆良くやって呉れるから喜こんで居る。俺は団結の良く取れた分隊と思って居る。

八月十四日

命にて五泊六日の予定を以てイロ〳〵島に出張を命ぜらる。中村軍曹、餘木兵長と共にバゴロッドの兵站に宿泊、町を歩き廻る。感じの良い町だ。夜兵站にて湯田曹長殿と話す。また福岡の明治に居た寺田さんとも話す。又鳥市（下洲崎）のとも（？）話した。ハーブリカの警備隊の由

八月十五日　快晴

久し振りにてゆっくりした気持にてペンを取って居る。泰新丸行ユチコン（？）永閑な船旅だ。朝九時出航、海面は凪ぎすべる如く走って居る。還り見るに上陸以来なんと多忙だった事よ。良く皆働いて呉れた心で感謝して居る。だがあの時堀内と井手尾を叩いた事は々だったろうか。相当ひどくヤッタが歯は大丈夫だったかな。反省する暇もなくやってきたが、やっぱり徹底的にやって良かったかな。分隊長としてやるのが真実だろう。そうだやっぱりやって良かった。俺の信条は、分隊の信条は

（良く働き良く遊べ）だ。

やる時はやる。遊ぶ時には大いに出鱈目やる。彼らも叩かれた方が気がすーとして良くなったろうと思って居る。長閑に船旅をやって居ても分隊員の加藤一ト兵はどうして居るかと案じられる。上陸し共に働けなかったのが残念だ。彼もさぞ気苦労し残念に思って居る事だろう。一日も早やく快くなって呉れよ、神に祈って居る。イロイロは比島第二の都とか物資はたくさんあるらしい。

八月十八日

パナイ島イロイロに上陸以来忙しい日を送って居た。遊ぶ方にかどうか分からぬが、兎角我々のあまり長く居る所では無い。良く今日迄自省して来たものと感心して居る。マニラよりセブよりどこよりも一番女は綺麗で魅惑的で兵隊になついて居る。日本語はよく話せる。歌等は我々よりもうまくなまり等は全然ない。実に上手いのに感心する。異郷の地に来て内地の懐かしい歌が聞かれようとは思わなかった。第一日目に早全部の名前を覚えられて仕舞う仕末。

兵站指定の「ときわ」と向への「喜楽」どちらも美しいサービスガールが居てサービスして呉れる。頭は確かに良く都会的に良く教育されて居る。これ等の民族は音楽好きで歌に明け、歌に暮れている。この二三日、なんと良く遊んだ事よ。一日に飯を五回、餅五回一ケ七十銭なり。アイスクリーム四杯、定食、コーヒー、ウイスキー、菓子。我乍ら、あきれて居る。正幹よ妻よ、お父ちゃんだけはまだ潔白だで安心せよ。さぞ皆心

配しとるだらうね。

八月二十二日

昨日より第八十梅丸に乗船、百トンの木造船、二十一日の夜はイロイロ最後の日とてトキワの二階にて四人にて宴會を催す。皆心からサービスして呉れ心より別れをおしんで呉れた。南国特有の踊も何回も踊って呉れ、ボーイは面白いダンスをやる。総勢十名位にもなった事だろう。手を叩き、足を踏みならして賑った。

トキワの皆さんから習ったパナイ島の歌を歌った。

花のパナイ島に未練は無いが可愛いあの娘に未練は残る。船は出て行くパナイ島の沖へ、僕は行きます○○へ。皆歌った

八月二十三日（二十二日）

パナイ島よサラバ　花のパナイよサヨウナラ

皆パナイ島の歌をデッキの上で歌った。三隻の船は走る。様々な思ひ出を乗せて。

途中トロール船に会ふ。魚を分けて貰ふ。デンマ船を下して行く。太きな魚がピン〳〵はねて居る。色々分けて貰ふて帰る。昼は早速美味い生きたタイのさし身に煮付等でとても美味かった。こんなに新しいのを喰べるのは始めてだった。昼食後、ある島の横に仮泊したので（一晩ここにて泊まる由）早速見習士官と二人で泳ぐ。俺は船首より飛び込む。久し振りにて心の晴れる思いす。汐はあまた島の間を縫いつゝ今日も船は走る。緑のもえる如くに鮮明だ。間、小さな部落が箱庭の如くに点々として居る。静かな航海だ。幸福の航海だ。船員の人達は皆やさしくして呉れる。皆んな仲良し。帰ったら大いに働こう。分隊員は大丈夫だろうか。自分一人、のんきにして居るのが済まなく思ふ。元気で居て呉れよ。

八月二十九日

加藤穣（仮名）の入院、全く残念だが、これも運命とあきらめて居る。加藤もさぞ淋しい事だらう。自分も分隊長として何事も出来ずに遠くバゴロッドに入院させるのを呉々も残念だ。だが今日バゴロッドに行き、加藤の思ひの外に元気になった様子を見、迚も嬉しかった。どうか一日も早やく元気になって帰って来て呉れよ。

分隊員一同待って居るぞ。

戦友倶楽部からゼンザイ、哉草（？）にカツ等買って行ってやった。とても喜んで居た。俺も久し振りにて腹の御機嫌を取った。

マナブラ東印にて

池

八月三十日

久し振りに落付いた気持ちで書いて居る。高原の夕、夕陽に真っ赤に燃えてパナイ島の彼方に沈んで居る。大きな入道雲が南方特有の雄大な姿をグット上に向って伸びて居る。パナイ島が見える。思い出の数々がチラ〳〵と浮かんで来る。今頃故郷の妻子はどうして居るだろうか。正幹は達者だろうか。戦局は或何に進展して行くか。

一日も早やく勝って帰り度いものだ。いまの戦局ではどうなるか。再び妻子に逢えるやら。運の良い部隊だ。大丈夫だ。比島に来る飛行隊は全部が満足な姿で来なかった。完全なのは我が一二三飛大のみではないか。運の良いのは運の良い俺が一二三部隊に居るからだと自負して居る。二十八日に南方航空の大島さんに手紙を伝えたが、無事につくだろうか。

九月十三日

忙しい侭に愛帖とご無沙汰して居た。今自分は防空壕の中で静かにペンを取って居る。もう生還を帰（迥）して居ない。虚心坦懐、鏡の様な気持だ。美しい心と過ぎればあとは汚いものが少しあるだけ。只管（ひたすら）、俺は戦ふのみだ。米機をやるんだ。戦友の仇を討つんだ。昨日から何回となく提く（巾編に是か）恵される（？読めず）。

俺は防空壕で書類を守って居る。友軍機が眞赤に火を吹いて目の前を落ちて行く。畜生!!敵機から俺の方向いて火を吹く操縦手の姿がはっきり分かる。憎い星がはっきり分かる。残念だ。田中軍曹と悔しかった。昨日は八十機、今日も何十機、何回も〳〵やって来る。なめた奴等だ。正幹の写真を見て居ると何か胸に熱いものが上って来る。お前は何時見ても可愛い。ああどうか元気で立派な日本人になって呉れ。又空襲だ。不気味にサイレンが鳴って居る。今度は死ぬかも知れんぞ。サヨーナラ。

九月十三日（＊ママ、右記の続きか）

空襲しきり。休む暇無く次ぎ〳〵とやって来る。完全になめた態度にて超低空にてやって来る。残念だ。遂にピストルにて俺の分隊員加藤精一戦死す。入江要助も共に戦死。畑辺一ト兵負傷。我部隊の最初の尊い犠牲を出せり。

全員憤激す。何処迄も生抜き、最後までも戦ふ、米鬼と。一時はもう駄目だと思□□（読めず、「思ひこんだ」か）が、日本軍に不可能無し。必ずやり遂げる。

九月十九日快晴

稲員上ト兵ト共に交換所勤務を命ぜらる。

此の最近は続様に悪事露見し上島中尉に合わす顔なし。相当信用して居たが、もう駄目だ。此処の勤務の方が気が楽で良い。呑気なものだ。だが此辺は一番空爆され安き所だ。命も保障出来ない。近くの瀧で魚釣り。五匹釣り早速料理す。

九月三十日　晴雲（ママ）

月を見つ　椰子の葉蔭に野戦風呂

静けさや　明日の戦が　思わるゝ

定期便　今日は何機と　空仰ぐ

銃撃に　倒れし　戦友の　なきがらに　我誓いなん　戦友の仇をば

銃撃に　倒れし　戦友の腕には　堅くにぎりし　送受話キ

今晩は眞暗な、そして迚も静かな夜だ。たくさんの虫の音が遠く近く聞こえた。

以上の句を頭をひねり〳〵やっと作詞した。作詞した事もなく、又好きでも無い。唯俺の今の心境が作らしたのだ。明日は無き命かも知れぬ。今日入るニュースは相変わらず不利な事ばかり、ミンダナオ、ボルネオにも敵続々と上陸の模様。近くのマナブラは早、軍票が通らぬ由。デモ（ママ）だと思うがハーブリカは一躍倍位に物価が騰って居る。戦況は刻々と変り、刻々と不利になって行。俺は決して不安がっては居ない。決して死なん。必ず勝つ。運の良い俺だ。俺が居る以上は此の部隊も運が良い筈だ。妻よ正幹よ。決して心配するな。父は立派に働いて来るぞ。人間になって居るぞ。

本日十一時四十分非常警備下令。明日は愈々大部隊の空襲を受けるやも知れず。

年貢を納める時が来たのかも知れぬ。寿命があれば又逢見得（字抹消か、読めず）。だが父は早やお前等に逢ふとは思っては居ない。俺の意志は俺の心は正幹が立派についで呉れる筈だ。種子。立派に育てよ。頼むぞ。ランプの灯の下にて。

九月二十一日雲後雨

急造り　飯盒すける豪雨かな

なんだか嬉しい様な雨だ。今日は俺の幸福の日だ。祝福されべき日だ。空襲なんかあるものか。部屋の中に天幕を張り其の下に飯盒をすけて居る。ちょっと変って居る。今日は北橋一ト兵が来。計三名少シ賑やか。

九月二十三日　晴

不気味な位に平穏な日が続いて居る。なんだか夢の様な気もする。今日はダラガがチキンを持って来たので早速北橋一ト兵と料理す。幸ボーイが約束を守って呉れてネギも間に合、野戦のチキン料理ができた。実にうまい。ダラガも二、三人来て話して行った。稲員一ト兵の十八番のタコ踊りが出て、ダラガが腹を抱へていた（三文字＊「ふ居る」ヵ抹消）。本日イロイロ出張より村山上ト兵帰る。無事なる声を聞き嬉しい。

九月二十五日

動哨に椰子の葉蔭に三日月

夕陽に白く輝くすすきかな

10、1（以下日にちの記載が下へ）

今日は一日箱崎に坊やの御詣りの日　鳩ともう遊んで居る事だろう。誕生日近し後十五日少し。実に早い日の流れだな。もう立てるかな。父も御前の健康と幸福を遠きネグロスのファーブリカより、雨の音を静かに認（聴）きつゝ祈って居る。

10、2

亡き戦友の墓前に香る異郷花

10、3

秋深し（月清し）　誕生近き　正幹かな

昨日からの雨が今だに降り続いて居る。物凄い豪雨

牧野吉晴著

町の兵隊さん　峠の一本松　共に良い作　人の汚れた心を底の底からゆする。

兵隊さんの澄みきった純心一途

兵隊さんの神々しいまでに純真無垢な心

松本茂大尉の教訓と最後迄守った心何より胸に来るものがある。

人の誠心の如何に強いか。また誠心の通づるの如何にかたきか。つらぬく心強気意志、御仏の強き力。久し振りにて良き教訓を学んだ。

19、10、4

兄を送る記

皆んな元気な事と存じます。私も至極達者にて働いて居ります。最近は雨の降る日が続いて居ります。私の心境にも色々と変化した様です。歌を詠む日もあります。或るものを超越し、或るものを過ぎれば静かな心になれるものだとわかりました。私の目前に迫るもの総て教訓と信じて居ります。最近自分乍ら見違える位は肥えて来ました。

正幹の誕生日

遥かな正幹の健康と幸福を祈る。今頃はどうして居るだろう。父は命令を受けバゴロッドに来て居る。無線教育の為め、元気でやって居るぞ。三十名の指揮を取って居るから、しんが疲れる。もう立つかな。元気な事だろ。悪戯ばかりやっとる事だらう。どんな運命の迫るか悪因縁の村山と一緒。偶然にも戦友倶楽部にて元重兵長（仮名）と逢ふ。元気だった。こんな嬉しい事は無い。

１９１０１５

逢うは別れの始めとか―。でもあまりに早やい別れだった。残念。でも一日でも逢えて良かった。どうか元気でやって呉れ。加藤を昨日見舞ふ。喜びと遺□だろうが。嫌な部隊ではあったが、いざ別れるとなると戦友はつらい。幾日逢えるかわからぬ。残念だがこれも戦場の常。頑健を祈る。

（※戦時名簿に「十月十五日バゴロド第二航測聯隊ニ分遣」とある。）

１９１０２０

本日も亦空襲さる。近くの島に続々と敵軍上陸の模様なり。我悲愴なる決心をせり。分遣隊員全員四十名。

我長

坂口兵長と友になりし事を喜こんで居る。加藤上卜兵は愈々二十二日退院セリ。待って居た戦友と逢えば直ぐ別れる。逢ふは別れの始めとか。別れのつらさは嫌なものだ。

１０２２

しと〳〵と雨が降って居る。全員舎前に出て見送って呉れる。愈々村山とも御別れ。五百部隊に転属。我々の前途にどんな運命が待って居る事やら。

明治節の今日の良き日、平（？）に染る様に青く澄んだ空、今日も亦Ｐ38の攻撃を受く。今日八四が飛出、壮烈なる空中戦を演ずる。火の出る様な空中戦だ。皆手に汗を握って見つめる。友軍キ落つ。幸落下傘にて降下。無念の涙を呑む。友軍機追撃と見る間にＰ38よりぱっと眞赤な火を吹く。途たん敵飛行士落下傘がパット開く。機は大きく半円を描き、火を吹きつゝ落ちガーンと云ふ音と共に眞赤な火柱が上る。一同思わず凱歌を上げる。亦三回のピッケの後、敵落下傘地上に落。

さらさらと雨の降る様な音のする椰子林内の仮の宿

１１１４

追撃と見る間にＰ38よりパッと火を吹く。同時にくらげの様な落下傘がぱっと開く。と思う間に決戦号、好餌とばかりに肉迫。手に汗握る緊張。ピッケ三度、遂に落下傘は切られぬ。あ〳〵我勝てり。本日はルーズベルトの当選祝いにて相当の敵機来襲せり。

△△椰子△△△

椰子ノ南方人類に及ぼす影響は大きい。貢献大なり。彼等一般の住居は皆屋根壁はニッパー、椰子の葉にて造られて居る。其の他帽子等多い。食料としては実の中にあ（る）コプラは油・菓子等が作られる。新芽は立派な食品になる。丁度たけのこに似た味を持って居る。亦実の稔る茎を切っては美味なトバ酒が採取される。トバ酒・午前と午後二回採酒され但(唯)ちに美味しい酒が出来る。コバルト色なり。始めは変な臭気するも、一般に受領される。個条書にすればトバ酒、ニッパー、コプラ、菓子、油（食用・燃料）、まき、野菜。

１１２９

月澄み坑(抗)々と中天に冴り、我月光を全身に浴びて動□(哨カ)せり。数丈そびえ立つ椰子の葉蔭より眞白に月光が差込んで居る。ふと椰子の木蔭に人の蔭見え美しき声流れる。土人の月に浮かれて踊って居るのだらう。カバイパ　マヨゲツ

踊りの名（手）　次々と踊って呉れる彼女らは　彼女らの生命は歌と踊りが生命だ。手を叩き、手振りおかしく身振りおかしく踊り続けて居る。

大櫛の様なる椰子の葉の白く光て夜は更けゆく

19、12、9　サンパギータ

ヒリッピンの桜とも云われる名花サンパギータ。白く香り高く可憐なる清楚(楚)なる感じのする花、白百合に似たり。島人は髪に差したり胸に差したりして居る。祝の時等は花をつないで首輪などにして居る。サンパギータは綺麗だ。

12、9

妻より手紙来。正幹の悪戯して居る姿が浮かんで来、懐かしい。相変わらず元気な由、

早や立ちかけて居る。しっかりと抱きしめてやり度い衝動にかられる。一人息子、長男、俺は比島の土と化すやも知れぬが――人よりも安らかな気持ちで居る。妻よ、種子よ、頼む。

12、10

昨夜の夜間定期便、どう間違えたか、市内の師団司令部の前に落下した。暗夜ではあるが、毎夜来て居る操縦手ならそう間違ふ筈は無いのだが、病気でもデングにでもかかったかな。いづれにしても大変なる事、早速公文書発行し、いつもの操縦者に来て戴く様に仕様。ゆっくり安眠も出来ない。

夕焼や　吾に長男　正幹あり

20、4、9

マンダラガン（椰子林）　思出の数々　エビ、トバ　平和なる魚釣り　美味しいトバ酒　毎朝一升ビンを下げて椰子林に行ったものだった。平和そのものの生活。

状況激変ス。比島の風雲は日に日に悪化す。ネグロス島にも近く上陸の算大なり。玉砕の腹を決めたり。司令所異動近し。

12、17

吾れ人よりも幸福と思ふ。吾ニ長男正幹あり　桜の九段坂に逢いに来て呉れ
正幹の成長した姿を見たい。父はいつまでも靖国の御杜より成長を見守って居る。
否！否！吾は絶体に死なんぞ。生きて生きて最後まで生きて戦ふぞ。我に神明の加護あり。

12、19

益々状況悪化　我等シライに異動せんとす。比島決戦の機、此ノ旬日あり、尚一層奮闘せよ、いたづらに一喜一憂するなかれ、吾敢然と征かん。

2、19

シライの町よ、さようなら。懐かしい想出の町シライ。夕方には牛通（返カ）に帰えらねばならぬ。吉田にも逢った。五十嵐軍曹、三島中尉にも逢ふ事が出来た。懐かしい原隊の人々よ。

俺の頭は混乱して居る。これで良いのかと反省される。悪い事だ。だがこ（？）まい。大いなる戦果があるんだ。万才だ。最後まで生きねばならぬ。本日平島は足を切断するんだ。どうぞどうぞ元気で居て呉れ。

元気で元峰（父）にて逢える日を待って居るぞ！アオローラ、左様なら。何日逢えるやら。自責の念にかられつゝ乱れし頭の整理もつかずペンの走る侭書いて居る。部隊長よ元気で。

雨が降る久し振りにて、此処牛返しの小山も雨に雲（姿）って居る。お山の生活も大分なれて来た。四泊位の予定にて町にでる。地方人の家にて実にうまい鶏を喰べ嬉しい。愉快な外出は終りぬ。夜間の微発。微発の最高十六羽。アオローラよさらば。トバを呑んで歌ひ、山の生活、何時の日まで続く事やら。以前（依然）として状況悪し。正幹よ妻よ頑健であれ。

※1・兵役履歴に「昭和二十年三月二十三日原隊復帰」とある。
※2・四月一日バゴロド飛行場より山中に後退、爆弾により負傷。

20、4、5

さは〳〵と淋しい風が吹いて居る。此処平塚の山中、自然と共に起□を共にして居る。
四・四　悪事して又幸の日とも云える日だ。目の前の一軒（一間）位の所に爆弾落下、幸にも耳及び肩少しの負傷したのみで難をのがれり。これ神助と思って居る。傷がチク〳〵と痛み始めて居る。寝るる家なし、喰べる米無し。だが俺は何時迄も生き、必ず復シウするぞ。今日昨日相変わらず頭も上げ得ぬ位の猛撃、マーチンコルセア（ユルセヌか）ノース畜生！

愈々下界とも御別れ、ユスアペーと交替服務。いまから□□（幾分か、読めず）の苦労をする事であらう。

斬込隊も早や出る由大いにやるぞ。刀を磨こう。内地の皆様一日も早く、一機でも多く優秀な飛行機を送って下さい。待って居る我々一日も早やく此の神機の来るのを待って居ります。

三月一日附伍長に任官ス。（※遡及辞令か）

4、7

今日も亦ヂャングルの壕の中、大自然と共に生きんとして居る。敵早数粁の所に登っ

て来て居る。蟬が無(鳴)いて居る。此の仇を討たずには絶体に死なんぞ。一日も早く傷がなほって斬込に行きたい。種子よ正幹よ、祈って呉れ。父は再び帰らるとは思っては居ない。頼むぞ。本隊未だ到着せず。

攻撃の　神機来るを念じつ、　吾只管(ひたすら)に剣磨く。

敵地に部□近きにあり、重迫砲の各眞近に聞ゆ。早数粁近くならん。だが吾等壕の中にて只管寝て居る。本隊到着也り　と(ママ)　戦友に逢ひたきものだ。

昼尚暗きジャングルの深き谷に壕堀りて　只管(ひた)すら磨く軍刀

今日も無事なる身を戦友と手を取り合いて

4、9

喜び合ふ　明日なき命一日も長らへて

神機と共に吾れ敢然と征かん

ウァーンと突込む時は死を感じ、引上げる時始めて生を感ずる。それの数分間の連続にて一日を終りゆく。銃爆撃の会間(あいま)、上の方にて友呼ぶ声せぬ。負傷せしならんと我案ぢ壕内の木の根に□落つる。永吾ボツ〳〵と（＊読めず）

4、14

ネグロスの深山の苔と化すとても必ずや討つ吾戦友の仇

安田、宗岡よ、必ず仇は討つぞ。有難う。

斬込隊大越中尉以下十一名壮烈ナル戦死

此の斬込隊の成功を祈って居る。迫撃砲戦車砲眞近なり、傷大ぶ良し。

20、5、7

神風台　二の丸□

戦友は吾々と別れ行きぬ。幾日果てるやも知れぬ吾身。今日の今迄生きのびて来しを夢の如く感ヅ。又病気もせず傷も後四、五日したら完全だろう。転口(々)として異動して行く吾身、平塚より蟬の森、神風台二の丸。明日は安、四の丸、最後の死ぬ迄苦労して死ぬ吾等、吾身乍ら可愛想だ。友邦ドイツも倒れぬ。今は早や妻も子も無い。只戦ふのみ。種子よ、正幹よ。左様なら。父は我は倒れるやも知れぬ。□（読めず）の日本を頼む。只父は日本の□□(飛行カ)機、いや大勝をせず日本の勝つのを見づ、死んで行くのを残念でたまらぬ。口惜しい。種子頼むぞ、分かるか。

雨にぬれそのま、草にふし、穴に（伏）す。木の根枕に浮かぶ故郷の楽しき日々数々。遠き夢と化しぬ。蟬の声のみ砲声しきりお日様の光の恵みを受けぬ。ジャングル内の生活、塩の御菜、米は幾日まであるのであろう。皆の日途、この生活が続くのだらうか。友は弾に倒れ病に倒れ行きぬ。体にやがてこけが生えるだろう。

転びつ、まろびつジャングル内を進み行く。負傷者は叩かれつ、はって進んで行く。かつらに足を取られ木の根につまづき泥まみれになって進む。平島四月三日戦傷死。満足な事も出来ず死んでいった。残念であろう。平和　大勝

良い文字だ。

噫々　運命　運命

運命ハ開クベキヤ　開カルベキヤ

運命ハ開カルベキ時モアラウ。ダガ俺ハ敢然ト開イテ行ク

次第ニ肉体ハ弱ッテ行ッテ居ル　今カラドンナ運命ガ俺ノ前ニ来ルカ

妻モ子モ無シニ国モ無ク日ノ本モ無、比島ノ深山ニ立籠リ山賊ヲヤルカ　我々ハ早、生カ死ノ分基(岐)点ニ来テ居ル　藷ガ食イタイ　砂糖ガナメタイ　万寿ガ食ベタイ　肉ガ食ベタイ、昨日ハ別天神(地カ)温泉ニ入リ四十日振リニ体ヲ洗ッタ、傷モ全快シタ

二日間歩キ続ケテ弓削部隊ニ到着セン時ノ味噌汁ノ美味サ、村山トモ逢ウ事ガ出来タ、戦友モ遂ニ征ク　斬込隊ヘ再ビ帰テ□(行)積リラシイ　何事モ無シ　云ふ事モ無シ　オ互ニ生キヨウ、生キテ　生キテ生キ抜クゾ

噫一日モ早ヤク東海岸ファアブリカ周辺ニ出タイ。

三千年ノ歴史ヲ持ツ燦　日本帝国ハ亡ビルノダロウカ

信ジラレズ。今カラカニヲ探シニ行ク。

五月二十九日

運命！俺が二十八年間苦労シて築いて来た自分□（「だが」か、読めず）此の数日にて失ツせんとして居る。名誉も地位も妻も子も家も捨てんとして居る。生きんが為に生きんが為に運命を開かんと動いて居る。必ず生き再び平和になって内地に帰るのだ。

そして此の日本が立つ時に再び戦ふのだ。俺はこの侭居ればのたれ死にするであらう。病気に必ず倒れる。それよりそれよりも生きて再び日本の為に戦ふのだ。俺の戦友は早や一人も居ず、元重（以下仮名）さんも倉知さんも藤岡さんも皆居ない。生きんとして部隊を離れて居る、永久に左様なら、元気で前途に幸福の来る事を祈って居る。世界は廣いのだ。そうだ、希望を以(待って)て生きるのだ。戦友はヤシ、カモテ、食料を求めて平地に

下った。
油やら何もかもない。やるんだ。兎角部隊を離れ様、決断!!
村山（仮名）も行ったのだ。戦友に何とかして逢いたきものだ。いつか逢えるだらう、元気で。自由!!妻よ正幹よ、頑健なれ。幾の日か逢える日楽しみに父は淋しく又希望を以て暮らそう。最近迄、（＊以下は空白）

6、2
かすかなる希望見え部隊はハーブリカ・ボガシ付近に下る由、噫々。
カモテが腸一杯食いたい。出て行った戦友はどうしただらう。なんとかして一緒につれてきて一緒に暮らし度いものだ。最少（もう）しの頑張りだった。地区に行く道、温泉に入った事しか今更乍ら懐かしい事よ。正幹よ、御前等の写真は最後迄俺の胸に抱いて居る。昨夜はカモテを少（小）さいのを二つばかり戴く。早速イモ粥にして戴く。うまい。涙が出た。

於シナンパラン　20、6、24日頃
遂に待望の山下りせり。青々とした、そして廣々とした大空、青々とした大平原。
目廻ひを起こしてしまふ。太陽、目がかすんで仕様が無い、シナイや海岸が近くに見える。我々の運命は平野は良いにあり林あり野原あり小川あり丘あり涼しいバライ。
小川にはカニ居り我々の一番の御馳走なり、今日はなんとかしてガマをつかまえて喰べ度きものだ。此の付近ガマ居るそうだが、カモテ万寿を喰んだ。
洗藷もそしてラッキョウも食べた。我々も色んなものを喰べて来たもんだ。オタマ杓子も、コケもデン〳〵虫、バッタ、ビキ、ヘゴ、皆々貴重なる食料だった。塩ナシ、生（生姜）ガ、コセウが調味料となりぬ。

20、7、5
目的地の野に下る。マナブクも直で目の下だ。海もパセナイ島も眞近に見える。鳥も喰った。水牛も猫も遂に喰った。実にうまい。燦々と太陽が頭上に煌々、小川あり丘ありバナ、ありパインあり（バ、ナあり）。だが俺には一番大切な戦友が一人も居ない。戦友の消息がボツ〳〵知れて来る。懐かしい、飛んでも行きたい。
良きにつけ　悪しきにつけて想ふ戦友　今日何処にて生活せるらん
戦友よ今日帰るか？帰らねば俺が行く。兄等と一緒に暮らすのを楽しみにして居る。
昨夜も夢に元重と倉知さんを見た20、7、5
戦友よ俺の気持が分かるか、分かるだらう。毎夜俺の心は泣いて居る。戦友!!よ恋しき
元重兵長!!よ　倉知伍長!!よ　藤岡兵長!!よ　堀本上ト兵!!よ山上さんよ
俺の心も弱くなった、兄等を想っただけで泣けてきそうだ

野邊送りの記　七月十七日
故陸軍上ト兵北橋興十郎君
今日は朝からしと〳〵と小雨の降る日でした。営庭に全員整列、英レイを見送りました。戦友が板に乗せて副官殿のお経に送られて行きました。埋葬される所は裏の開墾地でマナプラも海もパナイ島も一目で見える小高い丘、すすきの丘でした。附近は大きな大木の焼け残りがたくさん立って居ります。良い香りのするマンゴーの木の下に、埋めました。一人々花を投げ入れました。北橋の全身は花で一杯でした。静かにねむって居ます。北橋君よ、冥福を祈って居ります。

（＊は以上はペン書き、以下は鉛筆書き）
20、9、2〜3、00サンパブロ米軍駐屯軍兵舎ニ入ル
20、9、8　1350同兵舎出発バゴロドニ向フ
20、9、8　1700バゴロド米軍兵舎ニ入リ宿営ス
20、9、10　米軍飛行場其ノ他ノ作業ニ従事ス
20、8、13　1400グラマンノ奇襲ヲ受ケ松尾軍曹戦死
伊藤見士　池尾技手負傷ス
20、10、11、1400バゴロド収容所出発
同日1600　クロパンダン着宿営
20、10、12　1000クロパンダン出帆
同　1300イロイロ（パナイ）着
同　1700収容所着宿営ス
20、10、31　1145イロイロ収容所出発乗船
野辺送りの記　加藤（仮名）上ト兵20、8、13
松尾軍曹
午前永き病を得て伏して居た加藤

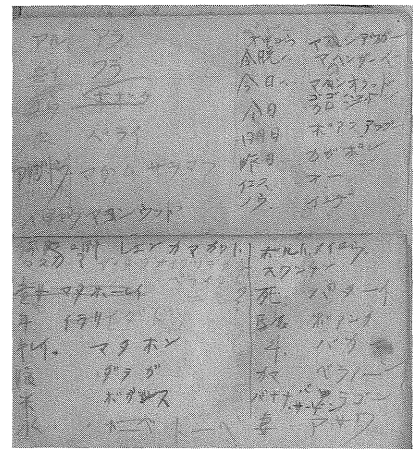

写真6　軍隊手帳のうち
現地語に関するメモ

俺の戦友　可愛い戦友　俺があれほど全快を祈って居たのに、遂に護国の柱となりぬ　す、きが原の見晴らしの良い丘　マナプラの海を見つ　加藤上ト兵は
静かにねむって居る　戦友のたむけし草花を体一杯に受けて居る
俺は泣けて〳〵
声を出して泣いた　あ、運命
午後敵きの奇襲を受け松尾軍曹壮烈なる戦死　二名負傷

資料4　臨時戦時名簿

陸軍戦時名簿
役種：現役・予備兵
兵種：飛行兵
出身別：特別補充
特業及特有ノ技能：通手・□□
本籍族称：福岡県福岡市本町□□番地
氏名：小林正夫　大正七年壱月□日生
勲等功級：昭和十五、四、二九（　）瑞八等
官等級：昭和十四三一五航空兵二等兵、昭和十四、九、一航空兵一等兵、同一五、九、一五陸軍一等兵（勅令第五八一号ニ依リ）昭和一六、九、一陸軍上等兵、同一七、九、二八兵長　同二〇、三、一伍長
履歴：昭和十四年三月十五日現役兵トシテ航空通信聯隊ニ入営○同日教育隊ニ編入同年八月十二日通信手ヲ命ス○九月一日昭和十四年軍令陸甲第二〇号ニヨリ航空通信聯隊ヲ編成改正シ航空通信第一聯隊ト改称○同日航空通信第一聯隊第一中隊ニ編入ス○昭和十四年九月四日新京出発同月六日海拉爾着支那事変勤務ニ従事○同年九月二十七日海拉爾出発同月二十八日新京着○同月十二月五日哈爾浜（ママ）通信所勤務ヲ命同年十一月十八日上等兵候補者ヲ命ス○昭和十五年三月一日兵精勲章付与ス○八月二十日哈爾賓通信所勤務ヲ免ス○同月二十二日哈爾賓出発○同月二十三日新京到着○昭和十五年九月一日兵精勲章付与○十一月二十七日命哈爾賓通信所勤務○三十日新京出発○十二月一日哈爾賓到着○昭和十六年三月七日哈爾浜通信所勤務ヲ免ス○三月九日哈爾浜出発○三月十日新京到着○六月三十日哈爾賓通信所勤務ヲ命セラレ新京出発○同日哈爾賓到着○七月十日哈爾賓通信所勤務ヲ免セラレ哈爾賓出発○十一日新京到着

昭和十六年七月二十四日緊急動員下令　臨時編成令下令○七月三十日編成完結○八月九日新京出発○八月十日敦化到着○九月二十日敦化出発○九月二十一日吉林省九□・永吉県境通過○同日新京到着○九月二十八日新京出発○九月二十九日関東州界（普蘭店）通過○十月一日大□港出発○十月八日高雄港上陸○同日屏東着○十一月十四日屏東出発○十一月十五日高雄港出発○十一月十八日第三飛行□□第一航空通信隊長ノ指揮ニ入ル○十一月二十日仏領印度支那サイゴン港上陸○十一月二十五日サイゴン出発○同日フノンペン着○十二月十五日フノンペン出発○同日コンポントラッシュ着○トラッシュ発○三月十一日サイゴン港出帆○三月二十七日ラングーン着○四月六日ラングーン発○同日プローム着○五月三日プローム発○同日ラングーン着○四月六日ラングーン発○同日トングー着○六月一日昭和十七年軍令乙第十三号ニヨリ第一航空通信聯隊ト改称○昭和十五年四月二十九日支那事変ノ功ニ依リ勲八等瑞宝章並ニ金九拾円ヲ賜ヒ支那事変従軍記章授与○八月二十三日第十一航空教育隊ニ転属ニタメラングーン出帆○九月二十四日宇品上陸○九月二十六日水戸着○同日補充交代ノタメ第十一航空教育隊ニ転属○同日第一中隊＝転属○九月二十九日陸支機密第二五四□号第四十一条ニ依リ現役満期除隊ヲ命ス
兵籍記入済
（＊以上はタイプ印刷、ここで初ページ終わる。改丁）

昭和十九年四月二十二日昭和十八年陸軍機密第五〇〇号ニ依リ編成部隊要員トシテ第四飛行場大隊ニ臨時召集セシメラル○同日補給中隊ニ臨時配属ヲ命ス○五月二十日昭和十□年陸亜機密第一五〇号ニ依リ第百二十三飛行場大隊ニ転属ヲ命ス○同日大隊本部ニ編入○

昭和十九年六月二十八日山口県厚狭郡王喜村出発○七月三日門司港出帆○七月七日台湾基隆港出帆○同月九日出港○七月十六日マニラ上陸○七月二十八日マニラ出港○八月十九日ネグロス島バゴロド上陸○同日ファブリカ到着同地警備○自昭和十九年七月三日至同年九月三十日間第一次比島作戦ニ参加○

十月十五日バゴロド第二航測聯隊ニ分遣○昭和二十年三月二十三日原隊復帰○
（＊以上はタイプ印刷、以下は自筆）
此レヨリ先は山中の戦争に付き記名無し
S20年9月4日投降　フイリツピンネグロス島
S21年12月14日　フイリツピンより名古屋港着　復員

資料5　長男の戦死公報

（毎日新聞西部本社版・2005年（平成17年）9月11日朝刊）

福岡県小郡市・無職　久間一秋・七四歳

昭和21年8月の、ある暑い日の午後だった。外地に派遣されている旧軍人の生存者の名簿をいつものように閲覧しに行っていた父の後を追うようにして、役場の人が自転車でやってきた。

父は瞬間来たばいね、と言って上がり框に尻をついた。

役場の人は、お参りさせていただきます、と言って、仏間に入っていった。父は這うようにして畳の上にあがってきた。そして、母と私の横に来て正座し、役場の人が出てくるのを待った。

やがて、仏間から数珠を手にして出てきた役場の人は、私たちの前に座って一礼し、公報が参りました、ご長男には去年の5月13日、激戦地となったフィリピンはネグロス島で戦死なされました、と言った。

そのあと、あなたが役場を出られてすぐ参りました、と弁解するように言って、公報を差し出した。

しかし私は、役場の辺りの郵便配達が朝のうちであることを知っていた。役場の人々にとっても、息子の生存を願って必死に名簿を繰る父に、その場で公報が来たことを告げるのは忍びなかったのだろう。

役場の人が帰っていくと、母は台所へ、父は仏間へ入ったまま、夕方まで出てこなかった。

その2　小林種子さんと福岡空襲

小林正夫・種子さん夫婦は、戦後60年城内住宅に住んでいる。

正夫さんは大正7年の浜の町生まれ。種子さんは大正8年の薬院堀端生まれ。大正ロマンの香り高い博多の街で育った。ちなみに種子さんの実家中島家は士族。父久一郎さんは槍の名手だったが、秩禄処分後は銀行員となった。没落する士族が多いといわれる中、転身に成功したようだ。母、カネさんは良家の子女を専門とする髪結いさんだった。職業婦人として働き、10人の子供を育てあげた。二人の話を聞いていると大正～戦前の福博の姿、今は消え去った地名の数々が豊かに浮かび上がってくる。大正～戦前の福博の街については、別の機会にまとめることとしたい。「母の影響かわからないが、自然と働こうと思った」という種子さんは、警固の佐藤ビジネス学校を卒業後、外地の陸軍特務機関のタイピストとなった。正夫さんは徴兵で4年間の兵役後、中洲の兄の写真館に勤める。そして昭和18年2月に結婚した。「お前じゃなきゃだめだと言ったのは誰？」と種子さんはからかい、正夫さんは平然ととぼけてみせる。今でも二人はとても仲が良い。薬院の料理屋で祝儀を上げた翌朝早く、正夫さんは軍事訓練へ出た。そういう時代だった。その年の暮れ、親族の紹介で、西日本新聞に就職した。正夫さんにも、いつ赤紙が来てもおかしくない状況だった。企業の就労者は召集後も給料が支給される。再び召集が来た後にも家族の暮らしが成り立つように、という配慮だった。そして昭和19年5月に召集。種子さんはまだ小さな子供を抱え、新下川端町で暮らした。以下の文章は、小林夫婦宅へ伺っての聞き取り記録である。

空襲前の川端でのくらし

種子　下新川端町27番地。（昭和10年の地図を見ながら）。これが西中洲、東中洲。川端、と。ここに（川端を指で示して）十五銀行があって、このあたり、一番にぎやかなところ。焼け出される前はね。（いまの）日本シティ銀行、あれと博多座の間。あそこの川渕がずうーっと、家だったの。でね、中洲にお父さん（正夫さん）のお店があったの（写真店）。写真写りに来たりね。七五三で来たり。戦時中は勤労奉仕させられたね。赤ちゃんおんぶして。能古島。みんな隣組でね。船に乗って。そして、能古島の防空壕掘り。掘った土をね。モッコ担ぎ。前と後担いで。それの手伝いに隣組から行くわけ。夕方になって帰ってくるわけね。

――子供かついで。

種子　ああ、おんぶしてね。若い男の人がいないんだから。ああ。（思い出して）そいでね。空襲の時は家の天井、今、ホラ、張ってるでしょ。それを全部剝ぐの。どこでも全部。焼夷弾が落ちたらいかんからゆうてね、ぜーんぶ。天井剝いで。うちなんかも誰も（男が）おらんでしょ。だけど隣がたまたま洗濯屋さんだったから、剝いでもらったり。（そんなことをしても）もう、川端も焼けてしもうて。もうなあーんもない。

――いつごろ疎開したんですか？

種子　強制疎開もあったの。でもうちは（強制）疎開はしてない。たとえばね川端町は家が混んでいるでしょ？だから強制で立ち退き。全部壊してしまう。行き先も全部自分たちで考えなきゃいけない。土地を買ってくれるわけでもない。

大空襲の夜――福銀の防空壕へ

――この間テレビで福岡大空襲の番組やってました。

種子　誰か出てたでしょ？

――はい、たしか、奈良屋小学校の人が。

種子　この辺はねえ。ずうっと焼けてるから。中洲も焼けて、春吉は残ったのね。この辺もずうっと大濠の方も浜も24連隊も全部焼のが原。焼け出されて新宮へ一時的にいった。妹がそこに嫁いでいた。糟屋郡新宮町下府。いたのは結局そこ。ここへ引っ越してきたのが昭和21年の8月28日……

――すごい。よく覚えてらっしゃいますね。

種子　うん。覚えてるねえ。空襲にあったのは26歳のこと。子供（長男・正幹さん）は昭和18年生まれだから、2つになる前。1歳ちょっと。空襲があった2、3日前から偵察機が来てた。博多湾上空旋回して。ああこりゃあ、危ないねえって。そしたら夜の11頃になったら空襲警報、サイレンが鳴ってねえ。こりゃあ危ないよ、って。向かい（の家々）は全部（強制）疎開だったの。その、今の福銀（福岡銀行）のとこにあった大きい防空壕でね、隣の人と、ああ、今日は危ない。今日は逃げにゃいかんよって言って、トランク一つ、（福銀の）防空壕の中に入れて。お茶碗とかね、米とかね、それから手のついた小さな鍋ね。そいで、トランクと。みんなも持って来て入れてた。そいで、そしたらもう、あっちこっち、29（B29）の編隊が、すごいよ。向こうのほうからウワーって。来たときはやっぱ……10機くらい……かな？そしたらね、（焼夷弾を）落として。あのー、浜のほうが燃え出して。それから呉服町のほうが燃え出して。そいから、大浜。大浜から浜の町。この辺がぐるりと焼けたの。こりゃあ危ないからね。

那珂川へ走る

――福岡大空襲の前までは、そういう体験無かったんですよね。もちろん。

種子　もちろんない。やっぱしねえ。勝つと思うから。勝つまでは。

――空襲のときはどういう感じでしたか？

うん。全然、怖くないっていってもねえ……ウソになるし。怖いけど、うろたえる訳にいかんしねえ。やっぱしちゃんと、こう。ちょうどね。家の前が十五銀行で、（地下防空壕で）78人亡くなったもん。そしてうちの裏が福岡銀行。だけど、　あたしとお隣りの人だけは危ないから、あそこ（十五銀行）に入ったら危ないから川さ行こうって、言って。（福銀の）防空壕へ出たり入ったりしながらね。行こうっていうもんだから。角に山一證券があったの。そいで、そっからホース持ってきて火事でも（もし火事が起こっても）水が入れとかなきゃいかんて。その頃水はちょろちょろ。防空壕の入り口に持ってきて、出しっぱなしで（水上公園へ走った）。山一にも誰もおらんし、帰ってきてみたら、これくらい中に水が溜まっとった。（後で聞いたら）防空壕の中も燃えよったって。あわてて水で消したって。そいでよかった。その中も全部燃えなくて。ずうっと、夜中よね。12時ごろ。玉屋[1]んところの電車道を水上公園までね。もう、防空頭巾かぶって、そしておんぶして。両方かついで。両手に何故かバケツ下げて……そのときは、もう、たくさん（人影は）いないの。すでに。人はまばらだった。もうどっか行って。そのころ、消防車も動かんでね。橋の上、立ち往生して。もう、あんまりおらんやったねえ。ゾロゾロとは……割合、閑散としといて。あたしたちだけね。もう、みんな逃げとった後じゃろうね。真っ暗。でも二十日ごろの月明かりがあるから。あれ。別段怖くなかったね。

正夫　やっぱ緊張しとうけんやろ。

種子　うん、子供おんぶして。まだ25くらいよ。それをおんぶして両方荷物持ってさ。靴はそのときに限って下駄履いて。

――下駄……

種子　はっはっは。下駄。玉屋の前からずうっと走って、西中州。西中洲の水上公園[2]。中洲の大橋。山笠のとき、こう、見るところがあるったい。ちょうど中洲の出っ張りのところにある。中洲日活ホテル（現・山城ホテル）の前。水上公園はもう広いの。昔から水上公園って言ってた。中洲と水上公園の間の中洲大橋の下に（逃げた）。んだもう。川の下には大きな石がいっぱい置いてあるわけ。そんな中を子供背負（しょ）って、カバン下げて。トランクは（防空壕へ）置いていったから。子供おんぶして。そして空襲。

1　玉屋＝大正14年、福岡市で初めて誕生した本格的デパート。以後川端商店街の顔だったが近年経営不振により閉店。

2　水上公園　中央区西中洲地内にある。1、236mほどで開園は大正13年。（財団法人福岡市森と緑のまちづくり協会［http://www.mori-midori.com/index.html］より）

3　昭和10年に夢野久作が『ドグラマグラ』出版パーティーを開いている（HPより）。

中洲から川端行く間は空襲なかったの（注・川端から中州に、の間違いか？）。ちょっと間があいたの。そしたら公園着いたとたんに敵機が来て。あたしなんかはさっと下に降りたでしょ。お隣のおばさんなんかは油脂焼夷弾だから、足を火傷した。そしてそのまま水に浸からないと。焼夷弾は落ちてきたときは、川は満ちてきたからねえ（満潮だった）。花火大会のときに金魚っていう種類があるでしょ。ああいう風に焼夷弾の火の塊が川の流れに沿うて、花火大会の時みたいに。そして上では（焼夷弾が）ボンボン。大きな映画館が有楽館とか寿座とか。川渕には水野旅館、中華園[3]、ビール園っていうのがあって。大きな旅館でしょ。次から次に燃えていくのが見えるの。誰も消す人はいないの。大きな映画館あるでしょ。その上に火が付いてどんどん燃えてウワーッて落ちる。川渕がずっと（強制）疎開だったの。家が全部無い。そいでね。（地図で川の渕を示して）ここで降りて、橋の下通って、こっから上がったの。

正夫　子供おんぶして行ったっちゃろうが。

種子　そう、まだ26でね。子供おんぶして。その辺は疎開した（家を壊したときの）材木がいっぱいあって、どんどん燃えて。

夜明け

種子　（川から）引き上げてもう、夜明け。空襲警報解除のサイレンが鳴るの。〝ウーーーーーーーー!!〟って。あれがえらい、気持ち悪い。解除になって、夜が明け出した頃から。みんなそこに方々から逃げてきて、帰ってきた。那珂川の川渕に。そいで、みんな三々五々、帰るわけ。あたしはちょうど、中洲から川端まで帰って。帰ったときはねえ。帰るときは下は片方下駄はいて、片方裸足。川へ流れて。そいでね。下（路面）はねえ。昔中洲は木レンガだったの。アスファルトじゃないの。それがねえ、燃えてるから所々、デコボコ。そしてもう。電線か何か下に線がいっぱい、落ちてるの。だから避けながら歩いて。

正夫　俺が帰ってきてしばらくするまで、（浜の町の）本町がね。レンガが焼けたとがそのまま残とった。

種子　木レンガがね。それからが、おもしろいっちゃんね……。そいて、焼け跡に行ったらね。みんな隣組の人が集まって、隣組の人（福岡銀行の防空壕に入った人々）は煙が。川端全部焼けてるから。（福銀の）地下に石炭、買い込んどうでしょ。そこに火が入ったから、みんな（防空壕から）出てくださいって言われて、また2、3階あがっとったのを降りてきて（外に出て）、そして玉屋と川の間の橋に逃げたって。もう、その頃あすこの川は臭くて臭くて。下水のドロドロやん。あの川。昔はね。今はあんなにキレイなね。

――そこへみんな逃げたんだ。

種子　（来たのが）後からだったから。橋の上にね。（※橋下に降りる余裕がなかったのか、あるいはすでに橋下は満員だったのか。）子供あたりは目が一日開かない。もう。みんな煙で（やられた）。そして自分たちの焼け跡でみんな戦災証明もらって。お寺も焼けた。きれいに。そしてね。火事があったら必ず瓦が（もともと）黒いでしょ。それが全部焼き物みたいに茶色。すごく熱いから。この辺に逃げてきた時は川端ん人は、病人は動けんから置いてきたって言われた。大浜は築港だから魚の市場、船の着くとこなの。今のベイサイド[4]みたいな感じ。（今は）こっから（今の北天神の辺りから）埋め立てでずうっときてるわけよ。KBC（テレビ局）の次、フタタ（衣料店）。お寺があって、安国寺ってあって、お墓もある。あの辺、材木町。そっから（先は昔は）海でね。海水浴場。広田弘毅の実家の大きな石屋もあって、松屋（デパート）の社長の家もあって。安国寺があって、そこから浜。電車が市民会館のほうへ通ってるでしょ。今のバス道。極楽寺が今のダイエーショッパーズ。

――結局、極楽寺が燃えたから、跡地がダイエーに？

正夫　焼けとろう。

種子　それで野間の方に引っ越したっちゃろう。そいでね。焼け残った寺が全部禅寺、禅宗。そう、ほとんど。だから春吉でもお寺はずっと焼けて。春吉もいっぱいお寺あったけど、でも禅寺は残っとったね。不思議。

焼け出されてから　――新宮町→屋形原→鳥飼へ――

終戦後すぐ〝アメリカ軍が上陸する〟という流言が人々の間で飛び交うようになった。海岸線近い新宮町にいる種子さんにもその噂が届いた。

種子　終戦になってすぐ、みんな〝アメリカ兵が来るからどっかに逃げなきゃ〟って言うわけよ。どこに逃げようかって。そしたらみんなね、車力って車に乗って。もう、どんどん、どんどん、どっか逃げて行くわけ……。

〝どっか行け〟ってもね。あたしなんかはどうしていいか分からんし。

そいで18日の日だった。屋形原のとこに行ったの。その頃、屋形原にこちら（正夫さん）のお兄さんが疎開してあったの。屋形原病院の近所。なんか、鶏小屋。鶏……百姓家にね。疎開してあった。広い養鶏場やった。ちょっとこう、板張りがあって。そいたらね。そこも百姓家の広ーいとこの一間（鶏小屋）やったもんね。そこにはもう親子6

人疎開してあって。そいでどうしようもないからって。それから泊ることもできずに、また新宮町まで戻った。野間から急行電車（西鉄高宮駅）まで歩いて。野間っていうか、あの結核病院はなんていうたかいな（注：現在の南福岡病院。旧称国立療養所南福岡病院のこと。屋形原2丁目）。急行電車に乗って。天神で降りて、そして城南線に乗って、新博多駅。今の千鳥橋。そしてそこで乗り換えて新宮に行くの。

――たーいへん……一日仕事。

種子　おおん、もう一日かかる。そいであんた、夏よ。もう――。傘もささずに暑い盛りをおんぶしてね。泊らないまま新宮さ帰ったわけ。ちょおっと、大変だった。

――それがデマで、怖いこと起こらないってわかったのはいつぐらいに？

種子　まあ。一週間だったかな？

次第にデマ・流言もやんだ。種子さんは戦災証明書を持ち、たびたび焼け野原となった福岡市内へ出かけた。戦災者用の配給品を受け取るためだ。子供は妹に預けていった。当時、川端の櫛田神社裏、川端商店街の角に門田提灯店があった（現在店は同商店街内を移転）。そこで配給品である傘や日用生活品を受け取った。やがて鳥飼の姉の家へ引っ越す。焼け出された姉も一緒だった。正夫さんの情報は何一つないまま、毎日姉と働いて日々が過ぎ、ちょうど1年目の昭和21年8月中、「レイテ島収容所のことを書いた新聞記事に正夫さんの名前がある」という知らせを受けた。やっと、生死も分からぬ夫の安否を知ることができたのだ。そしてそのころ、姉が戦災住宅のことを種子さんに薦めた。

城内住宅へ入る

種子　（地図中、市内天神5丁目を示して）ここ、須崎裏に戦災住宅が、市民会館のところ、前にね、いっぱい建ったの。何十戸か。城内住宅と同じように。そして、先の方に入るか、こっちで入るかって市役所に言われて、大濠（城内住宅）を選んだの。市民会館のとこにいくらかまだ戦災住宅が残ってる。今ある美術館や市民会館はもとは全部戦災住宅だったの。あそこに入っとったらまた引っ越さなきゃいかんかった。ここ（城内住宅）へ来たのは8月28日。

――なぜ大濠にしたんですか？

種子　こっち（大濠）の方が感じがいいでしょ？公園で。博多の真ん中に育ったからね、年から年中電気つけてたの。家のなか。町の中。昔の百燭電球。部屋は電気つけとかなきゃあ。暗いから（それほどの街中で育ったため、須崎よりも大濠の方が良かった）。うちの実家の本家が薬院堀端（やくいんほりばた）。だからあたしは大名（だいみょう）小学校に通ってて。大濠公園もよく行ってた。大濠公園は昭和2年に博覧会があって。小学校2年生のときだからそりゃあ覚えてますよ。中道にね、ボートに乗って、シャーっと水の中に入るの。

正夫　俺はあそこに入ってちょっとしたらナフタリンを作るところがあった。

種子　ナフタリンとかタバコ作ったりね、いろんなもの見せてた。

正夫　そしたらナフタリンを食べた人がおった。ぺろっと（こっそりつまんで口に入れるしぐさに、3人とも大笑い）。

種子　北口は入り口で、土手は松がいっぱい立ってキレイかったもんね。

正夫　うん。

種子　タル遊びもあったね。あの、大きなタルがぐるぐるぐるぐる回るの。中入ったりね。遊んで。そういう遊戯もあったの。そして、大濠全体あったね。

正夫　そう、全部。

種子　全部。滑り台がずうっと真ん中へんにあった。そして大濠の広さ全体が専売公社とか色々博覧会の出し物が色々あるじゃない。

正夫　あのときに初めて台湾のサトウキビを初めて食べた。

種子　まっくろい、大きなサトウキビ。黒いかね？縁が黒い。そしてボートやらいっぱい（水上に）出て。

――そういう大濠の方が感じがいいから……。

種子　そうそう。

この時の小林夫婦の思い出話は、ぱっと花が咲くように明るかった。まだ幼かった二人にとって、大濠公園の博覧会はもの珍しく、刺激的な記憶なのだろう。先述の終戦60年番組にも、福岡大空襲で家族すべてを失った女性が大濠公園を歩くシーンがある。空襲の恐怖やその後の生活のつらさよりも、今思い出すのは幸せな記憶―。この公園を家族と歩いた子供時代の日々―ばかりだ、と彼女は語った。独りで正夫さんを待つ種子さんにとっても、須崎よりも馴染み深い大濠を選んだのは、ごくごく自然なことだった。

――GHQはどこでしたっけ？

種子　今の簡易保険。あたしなんかここへ引っ越してきたでしょ。今の遊園地。そこから角のとこ、ずーっとかまぼこ兵舎。そういう形、してるから。テント。それがずうっと幾つもあった。そこにいっぱいアメちゃんがおって。そして今大濠の駐車場あるで

しょ。そこに将校兵舎。女の将校さんやらね。家がしゃれてるでしょ。ほんと、かまぼこ兵舎がずうっとあそこあった。そしたらうちの子供やらあれして、ハローやらゆうたげな。そしたら、向こうの列のトコなんかね。うっかりしとったら、（米兵が）夜入ってくるって。そいでそっちの角の方、ずらーっといっぱい並んで。そしたら縁側に立ってびっくりしたって。物取ったり悪いことしたりなんか（はしない）。そいで、八月ごろはいって、九月ごろ電気がついたの。

――それまでランプ？

種子　とうしみ。アブラを皿に入れて。そしてホラ時代劇に出てくるでしょ。あれをつけてね。電気はないし。今（玄界島地震避難の）仮設住宅はいいじゃない。冷蔵庫ある、電気ある。水道もある。あのころはなかったから。畳も一箇所に集めてある。そいで。畳を九枚抱えて来た。一人で。誰もいないから、ねえ。

――そうですよね。やるしかないですよね。

種子　そうそう。9枚。6畳と3畳。3畳の方は板張りやったかな？畳やったかな？

正夫　いや。俺が張ったねえ。おこたばつくったろうが。あんときに3畳は板張りやったろうな。

種子　そいで。9月ん半ば、水道はねえ、うちと結局ずらっと住宅が建ってるでしょう？（中略）そしたらここんとこに水道があるわけ。ここまで水道汲みにいかないかんわけ。8軒ぐらいに一箇所ね。（中略）

――煮たり焼いたりは？

種子　七輪。それを自分たちで買ってくる。炭も買ってくる。練炭とか小さい豆炭。木炭は使わないのね。炭は買いに行くわけ。戦前も全部お米とか配給。それで肉も魚も配給。

――肉魚は生で？

そうそう、隣組長のとこにあって、それを分けてくれるわけ。

――具体的に覚えてます？種子さん一人。ちっちゃい子供一人、月に何回？

種子　だいたい、給料もらってたから。（家計簿を）つけたりしてない。

種子さんからの聞き取りを終えて

十五銀行（現在の博多座）の防空壕で80人近い死者が出たことは、福岡大空襲のもっとも悲惨な出来事の一つとして語り継がれている。種子さんの家の近くで「最も大きく頑丈で安全」といわれたのが、この十五銀行の地下防空壕だった。しかし、それ以前に大規模な空襲経験はないものの、種子さんは「危ない」と感じた。最初に避難した福銀の防空壕もその後煙が上がって全員退去。彼らは玉屋前のドブ川に身を沈ませる以外に手立てがなく、煙で目を傷めた。しかし種子さんは、この福銀の防空壕から最初の段階で逃げ出し、水上公園に逃げた。「靴なんかたくさんあるのにその日に限ってなぜか下駄はいちゃった」と笑うが、かなり動揺したのだろう。その中で、なぜ決断できたのか。たまたま、水上公園まで行く間、焼夷弾が落下しなかった。焼夷弾に当たることもなかった。運がよかったというのもある。しかし、種子さんの「自分のことは自分で決める」という生来の生き方が、この決断を生存へ結びつけた一つだったのでは、とも思う。

種子さんが福岡大空襲と大濠公園にまつわる新聞記事の切抜きを大切に保存している事も付言しておきたい。A4のバインダー式ファイルの背表紙には「60・6・5　福岡大空襲追跡」とラベルが貼られている。昭和60年の6月に22日間、西日本新聞にて掲載された〝追跡福岡大空襲〟の切抜きが入っている（20欠）。このほかにも〝体験　福岡大空襲〟1～9（8欠・年代不明）、その他6点の空襲の記事がある（計35点）。また昭和60年8～10月に掲載されたシリーズ〝よみがえれ大濠公園〟8点がある。

なお『火の雨が降った・六・一九　福岡大空襲』（福岡大空襲を記録する会・一九八六年）にも手記が掲載されている。

資料6　小林種子さんの手記

取材を終わってのち、種子さんより手記が寄せられた。上記と重複するところもあるが、きわめて貴重な記述・証言であり、資料として添付する。

戦後の状態です。

主人が出征してから後は二才の息子と二人、日本軍戦勝のラジオ放送を聴いておりました。次から次と、戦勝だったのがサイパン島玉砕の報があったり、段々と厳しくなってきた様でした。

東京の空爆が放送されると、何かしら不安でした。それでも隣組からは何人かのこ（能古）の島の横穴防空壕を掘りに行く様にとのことで、私も子供を負んぶして、モッコ担ぎに行きました。春というのに暑く、子供を負んぶして一日中働きました。何回か参加しました。

戦時中は何回か肉の配給、正油も米は勿論戦後迄配給です。空襲にそなえて各家の天井板をとり抜（除）ける様にも指示され、我が家は女一人で隣家の人に、はがして貰いました。夜は一部屋だけ電燈をつけて傘の廻りに黒い布を巻いて明かりが外へ漏れない様にしま

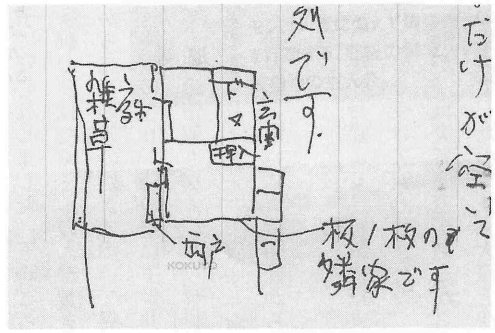

写真７　城内住宅間取り

した。

其の後夜十時を過ぎると、多分六月の始め頃から警戒警報発令があり、米軍機２機が博多湾上空を旋回して、警戒警報解除になりほっとして眠れました。

六月十八日、警戒警報が鳴ると物凄く胸騒ぎがしたもんで隣の人に今日は危ないよ、と大きな声で声を掛けて、慌てて子供を背負ってトランク一ヶ、防空壕に持って逃げ込むと同時に、空襲のサイレンが鳴り響くと共に、南の空からＢ29の編隊猛然と照明弾が落下し、空全体焼夷弾が雨のように落下、真っ赤になり遠くで空射砲がボンボンと響く中、南の方は一面火の海になり、私達の防空壕は、今の博多座の前にあったし、博多の中央でぐるり火の海で取り囲まれた様でした。

隣家の人を誘い此処は危ないからと子供を背中に、非常食を入れたカバンを両肩に、手には何故かバケツ（今にして思えば）を持って水上公園に走り、人影のない夜中、電車道をひた走りに水上公園にやつとついた頃、又もＢ29の来襲で私は階段を走り降り水の中へ。隣の人は足に焼夷弾の油を受け大やけど、それでも水の中に。そして水上公園と中洲の間の大きな橋の下の石垣の上で落ちたら危ないからと、橋ゲタの側でぢっと多くの人と岸壁の家々、旅館・中華料理店・映画館が次から次へと焼け、屋根がゴォーと落ちる様を眺め、遠くでは砲弾か何かの爆発する音ばかりが聴こえ、焼夷弾の油が燃えながら、丁度花火大会の金魚の様に流れ、上流へと流れて行き始め、水位が上がって来て、足元の水も石垣の上に立って居て腰迄になり、皆それぞれ中洲側の石垣の上から引っ張って貰って、子供は負んぶしたまま引っ張りあげてもらいました。上では材木（疎開の家の材木）がボンボンと燃える、子供のネンネコも水浸しだったけど何時の間にか乾いてしまいました。そこには顔を火傷した人たちが何人も居られました。白々と夜が明け始めて、初めて警戒警報解除のサイレンが鳴り響き、やれやれほっとしました。

中洲の電車道路はアスファルトが溶けてデコボコいろんな電線が道路一面に。其の中を片方下駄を（片方は流され）履いたまま、我が家の方へその辺一面焼けの原で、玉屋、十五銀行（福岡銀行）のみ聳えて見えました。

消防車は橋の上で立ち往生でした。

町内の人たちと一緒になり、集まり、無事を喜ぶと共に、何にも無い防空壕すら大きなほら穴の様でした。皆集まってくると子供は皆煙で眼が開かず（福岡銀行に避難した人たちです）、上川端のほうも焼け始めて、病人（動かせぬ）を置いてきました、と防空壕に逃げてこられた人達もおられました。

避難証明書を貰って私は義兄が来て焼け（てい）ないから来るように云はれ、姉達は奈良屋町の方で焼け出され、鳥飼に居た姉の家は残り、高砂町の姉の家も残り、焼け跡から荷物トランク（上のフタ焼けた）をリヤカーに、片方のタイヤは焼け片ちんばの車に荷物を乗せ引き乍、下駄は片ちんば防空づきん（頭巾）、腰に単衣のネンネコで子供を負んぶして姉の処の疎開の荷物を再びリヤカーに乗せ片方タイヤの無いのにトランクと柳ゴーリを乗せ、再び同じ格好で高砂から渡辺通り一丁目、天神石城町を通り、千鳥橋の前の宮地嶽線で新宮へ。リヤカーも乗せて貰い、やっとの思いで妹の居る新宮町へ落ち着きました。途中、石城町で倉庫の焼け跡に人がいっぱいでした。何かと走り寄ると、石の倉庫で皆かき集めてゐましたので、私も負けずと息子に着せていたネンネコに焼けた塩、真っ白な塩と一生懸命拾い集めました。終戦後も凄く役に立ちました。終戦になり電気のおおいを取ると夜の明るさ、サイレンの音がなく、ほっとしました。

と共に、どおなるか分からず皆荷物をまとめ何処かへ、田舎へ山のほうへと移動されるし、私たちも分からず、敵が上陸して来ると云う話で、どおしたらいいものか。主人の兄が屋形原に疎開してましたので、博多迄宮地嶽線。天神から高宮迄電車。それから子供を背中に屋形原迄歩いて８月18日の暑さの中、傘もささずに行きましたものの、疎開先も５人で狭くて泊ることも出来ず、相談しても何も解決せず折り返し新宮へ電車を乗り継ぎかえってきました。其の後も配給品を度々市内へ、子供は妹母へ預けて、焼け野が原へ貰いに行きました。

其の後原爆とは分からず、長崎に原爆が落ちたのが凄く、草一本何年も生えないとか聞き、汽車の切符が買えず新聞社（夫の勤務先）に行きました。玄関先で友人の将校に会い切符を手に入れることが出来、早速翌日新宮を出て博多駅へ。なんと夜十二時にやっと長崎行きに乗れることが出来ました。それが郵便車に窓から乗り込んで、列車は復員の兵隊さんばかりで満員でした。翌日は昼の十二時に長崎駅（丁度その時が始めて長崎駅まで、其れまでは空襲のため諫早駅迄しか行かなかったとか。初めての長崎、たずね、たずねて、兄が工場長をしていた工場が、グラバー邸の先のトンネルの中が工場で、事務所が山の上のお寺でした。お寺に着き、持って行った飯盒で其れまで何にも食べず、昨夜から初めての食事で、飯盒のフタを開け食べ様とすると、昨夜炊き立てを詰めたせいか、箸で食べ様とすると糸を引いてました。でも大事な銀メシです。私は半分は食べ、夕方のに残し、工場の人が現場にある事務員さんの遺品を届けるとの事で一緒させてもらいました。工場（トンネル）から現場は長崎の町の中で八月の二十五日は暑い盛り、

写真8　昭和20年代の城内住宅、女性の会
前列中央和装の人物のみ男性、「おかまのバー」を作った人だった。写っている人で生存者はいないだろう。

約何キロあったのか忘れました。また本社のあるところで被害にあわれた方を荼毘にしておられました。

途中何人も包帯した火傷された方、水を飲みに来て居られる方、田んぼには馬、牛がまだ横たわっています。見渡す限り焼け野原で異臭さえただよい、又大豆の焼けてくすぶる臭いとか只、只、夢中で歩き、どうなるか何も考えられず、兄に会えても只遺族の方の応対で忙しく、一言「お母さんが心配してたから元気がどうか見に来た」と云ひ、兄も「今度諫早から出る汽車で帰んなさい」と云っただけ。元気な様子で安心はしました。五時ごろの汽車で諫早を出て、十二時に博多駅に着きました。博多駅の前はたくさんの人が焚き火をしていました。私は博多駅から高砂（渡辺通二丁目から左）の兄の処まで歩いて帰り、翌日新宮へ帰り、母も安心して何よりでした。

終戦になり、姉の家に子供共に引越し、姉（焼け出された）とも一緒で、終戦になっても何の情報もなく、ただ毎日姉と一緒に働き、占いで主人の生存を見て貰ったり。「元気で居られますよ」で安心したりで一年が過ぎました。

其の間は幸いにも新聞社から給料を貰ってきたので生活にはそれ程不安はありませんでした。

21年8月姪より「新聞に正夫さんの名が乗ってた、レイテの収容所に居られる」との知らせを受けて安心しました。

姉が、戦災者住宅があるから須崎裏と大濠とどちらにすると云う事で、ずっと町の中の生活でしたのですぐ大濠と決めました。丁度今の場所が残っていて、他は皆入居してあると云う事で二十九号と云う事でした。隣組で我が家だけが空いていました。

姉が三十円家賃払ってくれて、29号に入居しました。

六畳と三畳と土間に流しがポツンと玄関を明けた処にあります。来たときは畳はなく、離れた処に畳を取りに行き、一人で六畳、三畳と、畳を敷きました。

コオロギが入ってきます。

電気はなく、風蚊がありましたので、六畳に夜は蚊帳の中で灯しみ（カンカンに油入れて）をたきながら、風呂は唐人町まで大濠公園を通り、其の両側には米軍のテントが何本も。又、今駐車場になっている処は将校宿舎でした。

風呂へ入る前は衣類のシラミの検査。白いシラミです。米軍のＤＤＴでそれも無くなりました。食料は乾燥人参等がありました。

主人が生死不明の頃は、朝倉郡の友人の処に訪ねてみました。爆弾の破片で耳と肩をやられていたが至極元気でしたから、大丈夫帰って来られますよと云われ、何となく安心しました。

城内町では米の配給は、当番で車で西公園まで各組で取りに行きました。

其のうちにまだ城内の裏の方（北側）は一人の人がコツコツと建ててました。

国体が平和台であった折に道路（バス道路）が舗装されました。

昭和二十一年十二月十三日ごろ、やっと主人が帰ってきました。戦前焼け出される前の町世話人の人が前住所に仮住宅で居られ、主人が名古屋に上陸して打った電報を昼過ぎに持って来られ、喜んで夢中で博多駅へ向かいました。

呉服町までしか電車は駅まで行かないので、呉服町から走って博多駅に行ったものの、会えず店屋町に親戚の家に行ったらそこに主人が居ました。二人で急いで帰りました。帰ってきて翌年マラリアが出ましたが米軍に貰ってきたキニーネを飲んだらすぐ良くなり、その後全然出ません。

この町に来て59年、街の中で育った私にはほんとに明るく、台風が来ても恐れることなく、子供たち三人も育ち、大濠公園は我が庭の様にしてる私共にも孫たちにも想い出の場所で、じぶん達の子供も、絶対大濠公園。此処を散歩するのを楽しみに、毎年夏は家族連れで狭い我が家も民宿の様に、夏だからこそザコ寝でも楽しみにし毎年来ます。

私共もこの地に骨を、ついの住処と思っております。

永々と書きました。読みづらい処も多くあると思います。

戦前戦後の私の結婚62年のことを申し上げました次第で、主人の戦地の手記の所見は、主人が考える事と存じます。戦後福岡空襲の事等、参考になりましたらと、私も一筆書かせて頂きました。

ご多忙中とは存じますがお暇な折に読んでいただきたいと思い、思いのままに書かせてもらいました。子供たちには戦前戦後の事等、よく話してきました。今も元気で主人はトトロ作り、私は編み物しながら刺繍したり、何時まで出来る事やら分かりませんが何時か終わりが来るかと思います。

先生にお逢い出来て、主人も永い間の胸の中を多くの人に分かっていただけて嬉しいと思います。お陰様で誰かの役に立てることが幸いです。

私も日赤に十七年間ボランティアをさせて頂き、主人は何十年も前から大濠の島のかもめにパンをやって十数年続けて来ました。今はトトロつくりに朝から夜遅くまでがんばっています。

後は先生にお願いして、辛抱強く努力する若者を育てていただいたく事を願っております。

おこがましい事ばかり申し上げて参りました。

先生とお会いでき、私どももお陰様で何かお役に立てたらと思いまして、ほんとに有難う御座いました。

草々

記憶・記録の公開によせて

『城内住宅誌』1として、全体座談会記録、および小林夫妻から提供を受けた記憶・記録を記述した。生還者が少なかったフィリピン作戦従軍者で手帳（日記）まで保存していた人は少ないだろう。幸福な市民生活をあきらめ、戦場に送り出される過程を、明確に、如実に示してくれる生の資料である。日記には妻子の名前が頻繁にでてくる。毎日が遺書のつもりだったにちがいない。死線をさまよっていても手帳を手離さなかったことは、手帳が妻子とのきずなであったことを強く示唆する。

山中生活になってからの記事は無いに等しい。生還できたのは奇跡だし、あと一月も戦争が長引けば、帰還はおぼつかなかった。棄てられた兵士たちだったが、その内部にも悲劇が起きた。

聞き取りの過程で、山本政弘『昭和への遺恨』（２０００、私家版。しらかば工房印刷販売　〇三－三九四八－六九九一）のようなネグロス戦回想記も入手できた。山本氏は九大法卒、元代議士、社会党副委員長で左派協会派＝向坂派の論客として知られる（昨年8月11日86歳で死去）。また影山三郎『レイテ島の曙光新聞』（縮刷版）（彩光社、１９８０、『レイテ島捕虜新聞　絶望から文化創造へ』〈１９７５、立風書房刊〉の増補版とある）、同『レイテ島曙光新聞物語』（彩光社、１９８０）も入手でき、具体的になった部分もある。しかしその分、小林さんの深淵にある心の傷をえぐり出すようなことにもなったのではないかと恐れている。固有名詞を出して兵士の動向を根掘り葉掘り聞くようなことはできないと感じた。

山本政弘『土の中からの呟き――続・昭和への遺恨』（２００３、同上）には土となった兵士に仮託された回想がある。戦死者多数については、編集作業中に目にすることのできた資料5を併せ示した。

今回ご了承を得て貴重な記憶・記録を公開することができる（兵士の実名は仮名にするよう要請があった）。ひとえに御厚意に感謝したい。

この記録作業にあたるなかで、戦争の非人道性を考え直した。再び戦争を起こすような社会、戦争を許すような社会にしてはなるまい。あらためて堅く決意した。最後に小林さんより寄せていただいた文章を付して、結びとしたい。

終戦六十周年を迎えて

或る御縁で九州大学大学院服部教授と御逢し、太平洋戦争末期の模様をお話しする事が出来、とても感謝して居ります。

家族の者にもあまり話したくない嫌な思ひ出でした。

でも戦争を経験した事を残さなくてはならないと思いました。

亡くなった多くの戦友達の為にも其の死が決して無駄ではなかった事、其の人達が居たからこそ現在の日本の繁栄があったのではないかとも思われます。

フイリッピンのネグロス島の山中で終戦少し前、小見山大隊長が四十数名の生き残りの兵を集め、お前達は優秀なる大和民族である、若しも生きて帰還出来る事あれば、戦死した三百数名の戦友の為にも、国の為め人の為めに尽くす様にと話された事、肝にめいじて居ります。

幸い私は健康に恵まれて居り、生ある限り自分の出来る限り、頑張ってゆき度と思って居ります

小林正夫

The Topography and History of the Jyonai jyutaku House (1)

…Summary and Stage before history starts

Hideo Hattori, Kana Honda

There is a still residential area that is called Jyonai-jyutaku（城内住宅：houses in the castle),in the Maizuru（舞鶴公園）park. This park is in ruins of the Fukuoka castle before.

Jyonai jyutaku House was constructed for people struck by the World War II damage, and so that those from the oversea land who repatriated it might live. They were the people who had lost all the properties for the war.

60 years passed after the war had ended. The move is requested to each Jyonai house, for the purpose of integrate Oohori park（大濠公園）with Maizuru park and to build the great central city park. This residential area existed in Sengo（戦後）, the age of postwar days. However, if the Sengo days ends, being demolished is a fate of this town.

We thought that we will make the record concerning this town. And, the interview investigation was done. Six representatives gathered, and the meeting that heard the story was held first. Then, the memories story of this house in which it lasted 60 was heard.

Case of the married couple named Mr./Ms. Kobayashi who lives in this house, the husband put on the khaki soldier, went to Philipino Negros island, had a narrow escape from death, and returned alive. The wife remained in Fukuoka, her houses was burnt in the damage of the air raid by the U.S.Army.

Mr. Kobayashi is preserving the diary in the military forces age. Such a pocketbook is very valuable. lt is possible to examine it comparing the both release and the description of the pocketbook. The talk becomes very concrete. These story talk about non-humanity that the war brings.